文学研究科専攻(専修)案内

京都大学大学院文学研究科

令和5年(2023)7月

目次

文献文化学専攻
国語学国文学専修 1
中国語学中国文学専修 2
中国哲学史専修 4
インド古典学専修 6
仏教学専修 8
西洋古典学専修 9
スラブ語学スラブ文学専修 10
ドイツ語学ドイツ文学専修 12
英語学英米文学専修 13
フランス語学フランス文学専修 14
イタリア語学イタリア文学専修 15
思想文化学専攻
哲学専修 16
西洋哲学史専修 18
日本哲学史専修 20
倫理学専修 22
宗教学専修 23
キリスト教学専修 25
美学美術史学専修 26
歴史文化学専攻
日本史学専修 28
東洋史学専修 30
西南アジア史学専修 32
西洋史学専修 33
考古学専修 35
行動文化学専攻
心理学専修 37
言語学専修 39
社会学専修 41
地理学専修 43
現代文化学専攻
科学哲学科学史専修 45
メディア文化学専修 47
現代史学専修 48
国際連携文化越境専攻 50

国語学国文学

教　授　大槻　信　　国語学，特に古代・中古
教　授　金光　桂子　　国文学，特に中古・中世
准教授　河村　瑛子　　国文学，特に近世文学
准教授　田中　草大　　国語学，特に文語の歴史

〔主要著書・論文等〕

大槻　『平安時代辞書論考　―辞書と材料―』吉川弘文館，「古代日本語のうつりかわり　―読むことと書くこと―」(『日本語の起源と古代日本語』臨川書店)。

金光　『中世の王朝物語　享受と創造』臨川書店，『時雨物語絵巻の研究』臨川書店（共著)。

河村　『古俳諧研究』和泉書院，「『笈の小文』旅中書簡小考」(『雅俗』18)。

田中　『平安時代における変体漢文の研究』勉誠出版，「『尾張国解文』現存テクストの成立についての試論」(『国語国文』87-12)。

授業は，上記の専任教員のほかに，人間・環境学研究科の国語学国文学の教員と，数名の非常勤講師によって行われる。他に，学部生対象の授業が開講されているが，自分の研究にとって有益であると思われるものは，単位とは無関係に履修することを勧める。

本専修では，大学院生の自主性を重んじて，教員からの助言は必要最少限にとどめるよう努めている。文献を読むときには注釈的に読むこと，できる限り文献が書かれた当時の理解に近づくこと，文献の背景の文化史，文学史，国語史の流れを押さえておくこと，こうした基本的な態度を身につけた上で，各自の問題意識に従って自由に研究を展開することを望んでいる。

大学院生は，卒業論文を書いたことを契機にして，各自が一応専攻分野を持っているが，あまり早くから自分の関心の対象を限定せず，国語学国文学の様々な問題に幅広く関心を持つことが望ましい。それが引いては専攻分野での問題意識を鋭く，豊かにもするであろう。

国語学国文学研究室では，研究活動の一環として，月刊誌『国語国文』を刊行している。国語学国文学関係の専門誌として，東京大学の『国語と国文学』と並んで歴史が古く，権威ある雑誌として学界から認められている。また，近年『京都大学 国文学論叢』という春秋二期の専門誌も大学院生の編集の下に刊行している。学部の卒業論文のすぐれたものがこれらに掲載されることもある。当然，修士論文はこれらに掲載されるレベル以上のものでなければならない。そして博士後期課程では，毎年一，二編の論文を『国語国文』や『京都大学 国文学論叢』に発表し，それらを中心に課程博士の学位論文をまとめてゆくことが期待される。

中国語学中国文学専修

教　授　木津　祐子　　中国語学史

著書　『京都大学文学研究科蔵琉球写本『人中画』付『白姓』』（臨川書店，2013）

論文　「「箇」の個別化機能と定指“量名”構造」（2019），「京都大学蔵王筠校祁寯藻刻『説文解字繫伝』四十巻について」（2020），「「官話」再読」（2022）

教　授　緑川　英樹　　中国古典文学

著書　『韓愈詩訳注』（共著，研文出版，2015～），『文選 詩篇』（共著，岩波文庫，2018～19）

論文　「欧陽修的美醜意識及其表現―囲繞対韓愈詩“醜悪之美”的接受」（2018），「万里集九《帳中香》的詩学文献価値」（2021）

准教授　成田　健太郎　　中国古典学、中国書論史

著書　『中国中古の書学理論』（京都大学学術出版会，2016）

論文　「王羲之と衛夫人の師承関係について」（2020），「唐宋の蘭亭伝説について」（2021）

上記に加えて，人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教　授　池田　巧　　漢藏語方言学

著書　『清華の三巨頭』（共著，研文出版，2014）

論文　「木雅語作格特徴」（2015），「俯觀藏羌彝走廊的語言分布及其相關的研究課題」（2017），「大谷大學所藏本《呂蘇譯語》について」（2019）

准教授　永田　知之　　中国古典文学

著書　『唐代の文学理論―「復古」と「創新」』（京都大学学術出版会，2015），『理論と批評　古典中国の文学思潮』（臨川書店，2019）

論文　「中国文学批評史と近代の文学論―20 世紀前半の通史を材料に―」（2019），「詩歌に伴う書簡―『万葉集』と唐代前期までの詩の贈答を通して―」（2022）

准教授　野原　将揮　　中国語音韻学

論文　「構擬上古音*Kr-：以《安大簡》「緣」為例」（2022），「Old Chinese “egg”: More evidence for consonant clusters」（2022），「闽语中来自*m.r-和*ŋ.r-的来母字」（2022）

漢民族によって築かれてきた中国の言語と文学は，時間的にも空間的にも他に比類がないほど広大な範囲に及んでいる。三千年を越える長い時期に及び，ヨーロッパに重なるほどの広い地域にわたって，一つの文化がとぎれることのない伝統を維持してきた。かつてはその中心に詩文などの正統的文学が位置し，時代の流れの中で戯曲，小説など多彩なジャンルを生み出しながら，二十世紀以降には文語に代わって口語が文学の言語としてふつうのものになるに至る。そこには多様性と統一性の共存がある。

本専修では，近代以前と近現代を異種の存在とする態度をとらない。また言語と文学とはそもそも切り離せないものである以上，中国語学と中国文学とを分離せずに，相補うかたちで学ぶ必要がある。したがって，いかなる分野の研究をめざすにせよ，古典文・古典詩・白話文の全般にわたる原典の充分な読解力，通時的研究・共時的研究のふたつの態度を両立させる視野，語学・文学にまたがる基礎

知識を要求する。その上にたって「なにが書いてあるか」はもとより「いかに表現しているか」を検討することこそが言語・文学の研究にほかならない。

日本の文化がその当初から中国の言語・文化と深く関わりを持ちつつ形成されてきたことはいうまでもない。研究の蓄積の最も豊かな国の一つに数えられよう。そうした伝統を生かしつつ，今日の要請に答えられる新たな研究を切り開くには，広い視野の中で中国の言語・文学を捉える態度が必要であろう。中国学の歴史は長いが，今日のこされている問題は限りなく多い。中国の文学が過去の伝統を帯びながら時代に応じて変化してきたように，その研究も伝統と現代とをいかに調和させるか，大きな課題を与えられている。問題点を自力で見いだし，考える意欲をもちつづけることを期待する。

研究を発展させていくにあたっては，海外の研究者と直接に意見交換できるだけの現代中国語・欧米諸語の運用能力が不可欠となるであろうこともとくに強調しておかねばならない。自国の文化に対する深い理解と愛着をもつ中国，古典古代以来の人文学の厚みを背景とする欧米，いずれも学ぶべき長所をあまた有するからである。

京大中文初代教授狩野君山像を囲んで（於人文科学研究所中庭）

中国哲学史専修

教　授　宇佐美 文理　　中国近世思想史
准教授　池田　恭哉　　中国中世思想史

〔主要著書・論文等〕
宇佐美『『歴代名画記』〈気〉の芸術論』岩波書店　2010,『中国絵画入門』(岩波新書) 岩波書店 2014,『中国藝術理論史研究』創文社　2015,「杜甫詩における視覺の問題」(『日本中國學會報』第六十九集）2017。
池田　『南北朝時代の士大夫と社会』研文出版　2018, 『中国史書入門 現代語訳 北斉書』（共著）勉誠出版 2021,「熊安生伝」(『京都大学文学部研究紀要』62 号）　2023。

上記に加えて，人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教　授　古勝　隆一　　中国古典学

〔主要著書・論文等〕
古勝　『中国中古の学術』研文出版　2006,『目録学の誕生』臨川書店　2019,『漢唐注疏写本研究』社会科学文献出版社　2021。

文学部の専修案内に，私どもは「中国哲学史は，中国人の思索の歩みを研究する学問である」，「中国人が何をどのように考えたかを知ること，中国哲学史研究はこの一事につきる」と記した。中国人の思想的営みを歴史文化の一環として把握すること，これが中国哲学史に対する私どもの一貫した基本的姿勢である。従って，学部と大学院において研究教育内容が根本的に異なることはあり得ない。大学院の研究教育においても，学部におけると同様，「一切の先入観を捨て，中国人の立場に立ってその思考を跡づけることがまず必要であり」，そのために「何よりもまず中国古典，いわゆる漢文が正確に読めることが必要である」ことに何の変わりもない。大学院生にとっても，やはり「漢文読解力修得が第一の肝要事である」。ただし，研究者養成を主要目的とする大学院においては，当然のことながら，学部よりはるかに高度な学力が要求される。文意の正確な理解はもとよりのこと，その文献の文献学的考証，書かれた時代の状況，著者の生い立ちなどを正しくふまえた上で，内容のみならず用語や表現にまで鋭敏に反応する能力を修得しなければならない。読むことに関しては，修士課程修了の段階で，少なくとも自らの専門分野については独立した研究者としての能力を身につけてもらわなければならない。

しかし，学力養成のみが大学院教育の目的でないことは言うまでもない。その最終目的は独創的研究者としての基盤を確立すること，具体的にいえば学位(修士・博士)論文を完成することであって，文献処理の精確さはその不可欠の前提にすぎない。ただ，この目的は全て院生諸君自身の力によって達成されなければならない。何を研究題目に選ぼうと，いかなる研究方法をとろうと，それが学術的水準を満たしている限り，まったく諸君の自由であり，私どもは原則として口出しはしな

い。というよりむしろ，誰の模倣でもない君独自の問題意識と方法でなければ困るのである(念のために注意しておくが，このことは先人の研究成果への敬意と学習が不要であることを意味するものでは決してない)。むろん私どもは，スーパーヴァイザーとして研究計画の策定，執筆項目の設定，参考文献の指示などできる限りの“指導”は惜しまない。が，それはあくまで技術向上のためのコーチングにすぎないのであり，研究の遂行は全て君自身の主体的責任と意欲によって果たされるべきものであることを銘記しておいてもらいたい。

インド古典学専修

教　授　横地　優子　　古典サンスクリット文学，ヒンドゥー教史
教　授　ソームデーヴ･ヴァースデーヴァ　　インド思想，シヴァ教，サンスクリット文学･文学理論
特定外国語担当講師　潘　涛（パン タオ）インド・イラン文献学、印欧語言語学、トカラ仏教

〔主要著書・論文等〕
横地『ヒンドゥー教の聖典二篇：ギータ・ゴーヴィンダ，デーヴィー・マーハートミャ』(小倉泰と共著)，平凡社(東洋文庫)，2000 年。同 *The Skandapurāṇa Volume III, Adhyāyas* 34.1-61, 53-69. The Vindhyavāsinī Cycle. Leiden & Groningen, 2013.
ヴァースデーヴァ *The Recognition of Śakuntalā by Kālidāsa*. Clay Sanskrit Library. New York 2006. 同 *The Yoga of the Mālinīvijayottara*. Collection Indologie 97. Pondichéry 2004.
潘 *Untersuchengen zu Lexicon and Metrik des Tocharischen*. PhD dissertation, Ludwig-Maximilians-Universität, München, 2019.

本専修は，従来あった「インド哲学史」専修と「サンスクリット語学サンスクリット文学」専修を統合して，2004 年度より開設されたものである。サンスクリットは，厳密には規範化された古代インド・アーリア語を意味するが，本専修では，この言語で残された文献と並んで，時代的にサンスクリットに先行するヴェーダ語，サンスクリットの俗語形である「中期インド」諸語，一部の仏教文献に見られる仏教梵語，叙事詩に特有の叙事詩サンスクリットなど，古代のインド・アーリア系諸言語で編纂された膨大な量の文献も研究の対象としている。また，サンスクリット文献と密接な関係を持つ，古代イラン語文献やタミル語の古典文献も扱われることがある。本専修の役割は，過去のサンスクリット学の研究成果を継承しつつ，古代インドの言語，文学，哲学，宗教，文化史等の研究を進展させ，それを次世代に引き継ぐことにある。

専修主任の横地は，古典サンスクリット文学と，ヒンドゥー教の神話・伝説を多く含むプラーナ文献等の研究を専門としており，とりわけヒンドゥー教女神神話の形成・発展について詳しい。教授のヴァースデーヴァはインド哲学全般を扱うが，特にシヴァ教文献及び古典文学とその理論（詩論・修辞学等）を専門とし，近年は新論理学の研究に力をいれている。潘はトカラ語文献を専門とするが，南アジアから中央アジアにおいて使われたインド・イラン語文献，中央アジア出土の写本全般にくわしい。

また，毎年学内外から数名の講師を招き，ヴェーダ文献、中期インド語，近現代インド諸語，土着文法学，科学史等の授業を開講している。

本専修は国際的にインド古典学の主要な教育・研究拠点の一つとして認められており，海外の研究者との研究交流，共同研究もさかんに行われている。そのような現状をふまえて，本専修の授業のほぼ半分は英語で行われている。学生は日常的に英語での議論や質疑に参加することで，英語のコミュニケーション能力を高めることができる。

ジュニア・オープンキャンパスのポスターセッション用ポスター（学生製作）

仏教学専修

教　授　宮崎　泉

〔主要著書・論文等〕　『中観優波提舎開宝篋』テキスト・訳注『京都大学文学部研究紀要』46, 2007. Atiśa (Dīpamkaraśrījñāna)—His Philosophy, Practice and its Sources, The Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, 65, 2007.『禅定灯明論』に説かれる漸門派説について,『仏教史学研究』51-1，2008. インド大乗仏教における解脱の思想と慈悲,『日本の哲学』12, 2011. Atiśa の如来蔵思想—その典拠と大中—,『印度学佛教学研究』65-2，2017 他

本専修は，インド及びチベットの仏教思想史の研究と教育を中心としているが，中国仏教については人文科学研究所のスタッフその他学内及び学外の研究者の出講によってこれを補っている。日本仏教は扱わない。

本専修を志望するものは，サンスクリット語（パーリ語）及びチベット語の修得を既に終わり，かなりの程度にオリジナルの文献を読んだ経験のある者が望ましい。漢文仏教文献を扱い得る漢文の素養も必要であることはいうまでもない。仏教学は国際性の高い学問であり，諸外国の研究者や留学生との交流や留学の機会も多いため，本格的に研究を進めようと思う学生は英・独・仏のうち少なくとも一つについては作文・会話を含めて十分に習得することが望まれる。

宮崎教授は後期インド仏教を専門とし，そのチベットへの伝播についても関心を持っている。特に，インド禅定思想のチベットへの受用の問題，並びに大乗仏教の展開について研究中である。

本専修のスタッフによる特殊講義，演習，講読のほかに，サンスクリット語，パーリ語，チベット語の初級，中級の授業も用意され，またインド古典学専修の授業のうちいくつかは本専修と共通となっている。

令和 5 年度には学外から来講している室寺義仁講師(滋賀医科大学非常勤講師)が瑜伽行派を，佐藤直実講師(宗教情報センター研究員)が大乗経典を，志賀浄邦講師(京都産業大学教授)がインド仏教論理学を，加納和雄講師(駒澤大学准教授)がサンスクリット写本読解を，高橋慶治講師(愛知県立大学教授)がチベット語中級を担当し，船山徹講師(人文科学研究所教授)が中国仏教を，熊谷誠慈講師(人と社会の未来研究院准教授)がアビダルマを，デロシュ マルク ヘンリ講師(総合生存学館准教授)がチベット仏教瞑想論を，倉本尚徳講師（人文科学研究所准教授）が中国仏教を講じている。

西洋古典学専修

准教授　河島　思朗　　西洋古典語学西洋古典文学
助　教　竹下　哲文　　西洋古典語学西洋古典文学

〔主要著書・論文等〕

河島『古代ローマ ごくふつうの５０人の歴史 ―無名の人々の暮らしの物語』(さくら舎, 2023),『基本から学ぶラテン語』（ナツメ社, 2016）,『西洋古典学のアプローチ』（共編著, 晃洋書房, 2021）,『ホメロス『イリアス』への招待』（共著, ピナケス出版, 2019）

竹下『詩の中の宇宙　マーニーリウス『アストロノミカ』の世界』(京都大学学術出版会，2021)，G. ヴァルトヘル『西洋古代の地震』（共訳, 京都大学学術出版会，2021）

紀元前 8 世紀のホメロスから後 2 世紀のローマの著述家まで，ギリシア語・ラテン語を用い同一の文化的精神的伝統を共有する世界を古典古代という。そこにおいてギリシア文学は叙事詩・抒情詩・悲劇・喜劇・歴史・牧歌・小説など，さまざまな文学ジャンルを生み出し，ラテン文学はギリシア文学を継承しつつ，恋愛詩・風刺詩・弁論など独自の発展を織り込んでルネッサンス以後の再生に連なる古典の伝統を築き上げた。

本専修は，一方で，これらの文学作品を主要な研究対象とする。さらに，古典古代にギリシア語とラテン語で書かれたすべての文献をも研究領域に含めつつ，原典批判を基本に，テクストを精細に読み，背景にある伝統を踏まえ，文脈に即した解釈を提起すべく研究を進める。

その一方，西洋古典学という学問の特質，および，古典古代以前と以後にも注意と目配りを忘れない。すなわち，西洋古典学は古代にあっても近代の新たな出発点にあっても，文学，哲学，歴史学など人文科学分野にとどまらず，数学，物理学，天文学，医学，生物学などの自然科学分野をも含んで，人間にかかわるすべての学問分野にまたがる形で成立し，その根幹には人間を分割しえない完結した個体として総体的に捉えようとする視点があった。また，ギリシア文化の形成にあたっては，エジプトやメソポタミアの先進国から多大な影響が及び，他方，古典文化の伝統はビザンチン文化やカロリング朝文化，さらにはイスラム文化によって継承されたという，文化史の大きな流れを視野からはずすことはできない。

本専修における大学院進学者は，京都大学文学部出身者よりも他大学出身者の方が多い。古典の語学・文学を研究する学生はもちろん，文化を研究する学生にとっても，もっとも重要なのは第一次資料となるギリシア語・ラテン語の原典を読みこなす能力である。また，辞書・研究書は外国語のものがほとんどであるから，英・独・仏等の近代語にも堪能であることが要求される。古典古代を広い視野から研究するために，古代哲学史・西洋古代史の授業をも積極的に受講することが望まれる。

スラブ語学スラブ文学専修

教　授　　中村　唯史　　近現代ロシア文学・思想，ソ連文化論
〔主要著書・論文等〕『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』（共編著，ミネルヴァ書房，2022），バーベリ著『騎兵隊』（翻訳・解説，松籟社，2022），『二十六人の男と一人の女：ゴーリキー傑作選』（翻訳・解説、光文社古典新訳文庫、2019），『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』（共編著、水声社，2018），トルストイ著「ハジ・ムラート」『ポケットマスターピース４・トルストイ』（翻訳，集英社文庫，2016 所収），『再考ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚』（共編著，せりか書房，2012）

また、上記に加えて、下記の先生が、協力教員として、教育および研究指導に当たっている。

准教授　　堀口　大樹　（人間･環境学研究科）　　スラブ語学，バルト語学
〔主要著書･論文〕Имперфективация заимствованных глаголов в русском языке. Russian Linguistics. 42, 345-356, 2018,『ニューエクスプレスプラス・ラトヴィア語』(白水社, 2018), Восприятие обозначения "русскоязычных" в балтийских странах: социолингвистический опрос. W poszukiwaniu tożsamości językowej. 6. 39-48, 2021.

本専修は，それぞれに固有の特徴を示す一方で，多くの共通点を持つスラブ諸民族の言語と文学，そして文化を総体的に踏まえつつ，日露比較文学を含む個別的な対象の教育・研究を進めることを趣旨としている。ロシア政府・軍によるウクライナ侵攻という事態は，日本ではなお多分に未知の領域であるこの地域の文学・文化・思想を研究することの重要性を示している。

専任教員の中村は，20 世紀のロシア語文学と多民族・多文化性を標榜したソ連文化の研究から出発して，現在は 19 世紀から 20 世紀初頭のロシア文学・思想へと関心を広げている。協力教員の堀口は，ロシア語とラトビア語を主な対象としたスラブ語学とバルト語学を専門とし，テクストの特徴やコミュニケーションの場面，さらには社会や文化，歴史などの多角的な視点から言語事象を研究している。

本専修では，文献を緻密に読み解き，解釈する作業と，週 2 回のゼミでの報告とディスカッションを軸とし，ロシアの文学・文化・言語・思想，ポーランドの言語・文化，および考察の枠組や方法等に関する授業を開講している。院生諸君の関心は多様であり，それぞれの興味に応じて自由にテーマを選び，研究を進めている。授業も，本学の文学研究科、他の研究科の教員，ならびに非常勤の先生方の応援を得て，できる限り幅広く，かつバランスよく開講できるように努めている。ロシア，ポーランド関係の授業の他にもチェコ語の勉強会が実施され，学外・国内外の研究者を招いての公開講演会や上映会も行っている。

当専修を志望する諸君は，まず自分の専門分野を確立したうえで，将来的には，幅広い研究を目指してほしい。学部でロシア語・ロシア文学を専攻した人は大学院入学後に他のスラブ語や文学について学ぶ必要が出てくるかもしれない。他方，ロシア語がスラブ研究のための国際的共通語として重要な地位にあった経緯に鑑み，また 19 世紀ロシア文学が近代日本文学に深甚な影響を及ぼしてきた事実もあるので，ロシア以外の言語・文学を専攻した人も，入学までにできる限りロシア語の力をつけ

てきてほしい。とはいえ，修士課程入学時にまず第一に要求されるのは，それぞれが学部で専攻した言語，分野についての十分な学力と，自主的に勉学と研究を進めるための意欲である。

広範な文化現象を対象としうる本専修においては，担当教員が十全な知識をもって院生諸君の要望に応えられない場合も想定されるが，そのようなときでも諸君と意見や見解を交わすことはできる。人文学の基本が「対話」であると喝破した文芸学者ミハイル・バフチンを生んだロシアを初めとするスラブ文化の研究を志す諸君に期待したいのは，言語に対する感性を磨き，文化や歴史に関する知識を拡げようとする意欲とともに，それらの感性や知識に基づいて生じた自分の見解を教員や先輩と交差させ，たえず検証する開かれた姿勢である。

（詳しい情報については，下記のアドレスから，当専修ホームページをご覧ください）

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/slavic_lang_lit/sll-top_page-3/

写真：専修主催公開講演会　チンチ・クラプリ氏（ヘルシンキ大学）
「ソ連とロシアにおけるサーミ文学」（2022 年 11 月）

ドイツ語学ドイツ文学専修

教　授　松村　朋彦　　近代ドイツ文学・文化史（令和６年３月退職予定）
准教授　川島　隆　　近現代ドイツ文学・メディア論

〔主要著書・論文等〕　松村『越境と内省　近代ドイツ文学の異文化像』(鳥影社，2009)，『五感で読むドイツ文学』(鳥影社，2017)，『文学と政治　近現代ドイツの想像力』(共著，松籟社，2017)。川島『カフカの〈中国〉と同時代言説』(彩流社，2010)，『ハイジ神話　世界を征服した「アルプスの少女」』(訳書，晃洋書房，2015)，カフカ『変身』(訳書，角川文庫，2022)。

本専修の研究教育の対象領域は，中世から現代へといたるドイツ語圏(オーストリア，スイスを含む)の言語文化全般にわたっている。松村教授は，18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのドイツ文学を文化史的な観点から考察しようと試みている。川島准教授は，19 世紀から現代に至るまでのドイツ文学をジェンダー論的に読むかたわら，メディア論にも関心を寄せている。専任教員の専門分野からもわかるように，研究教育の中心をなしているのは 18 世紀以降のドイツ文学であるが，それ以外の研究領域についても，人間・環境学研究科や人文科学研究所の教員ならびに他大学からの非常勤講師，さらには外国人教師の協力を得て，多種多様な授業が開講されている。ドイツ語学に関する授業も毎年おこなわれている。授業の他に，学生による読書会も盛んである。

本分野の研究教育の特色は，講座開設当初から一貫して，原典の綿密な読解を重視する点にあり，この伝統は今日もなお生きつづけている。だが他方では，新しい方法論の出現と対象領域の拡大によってますます多様化しつつある現在の研究状況をふまえて，せまい意味での語学・文学研究の枠組にとらわれることなく，広くドイツ語圏の諸芸術や文化と社会のさまざまな問題に目を向けることもまた必要であろう。

さらに，ドイツ語圏の言語文化が他の欧米諸国との密接な影響関係のもとに成立，発展してきたことを考えるなら，ドイツ語学ドイツ文学を西洋文化全体とのかかわりのなかでとらえようとする視点もまた，今後ますます重要になってくるだろう。

このような意味で，ドイツ語学ドイツ文学を研究しようとする学生諸君には，ドイツ語のテクストを正確に読みこなすだけの語学力と西洋文化全般に対する広範な関心を期待したい。

英語学英米文学専修

教　授　家入　葉子　　英語学
教　授　廣田　篤彦　　イギリス演劇
教　授　森　慎一郎　　アメリカ小説
准教授　小林　久美子　　アメリカ小説
准教授　南谷　奉良　　イギリス・アイルランド小説

〔主要著書・論文等〕　家入　*Negative Constructions in Middle English* (Kyushu University Press, 2001). *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English* (John Benjamins, 2010).
廣田　"The Tardy-Apish Nation in a Homespun Kingdom： Sartorial Representations of Unstable English Identity", *Cahiers Élisabéthains* 78 (Université Paul-Valéry Montpellier III 2010). "Circes in Ephesus：Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English Identity", *The Shakespearean International Yearbook* 10 (Ashgate 2010).
森「ギャツビー・ゴネグション ―― フィッツジェラルド『偉大なギャツビー』をめぐって」『みすず』第 46 巻第 3 号．同アラスター・グレイ『ラナーク――四巻からなる伝記』訳書，国書刊行会。
小林　「『人間の根源的な状況』について」(『フォークナー』18 号、2016 年). "'Only the Flat Irons'：Counter-monuments in *The Sound and the Fury*"（*The Journal of the American Literature Society of Japan* Vol. 12、2014 年).
南谷　"The Metamorphosis of Stephen Da(e)dalus: The Plesiosaurus and the Slimy Sea," *James Joyce Quarterly,* vol. 58 (Fall 2020-Winter 2021). 「『ユリシーズ』と動物の痛み―レオポルド・ブルームの優しさについて」『ジョイスの挑戦―『ユリシーズ』に嵌る方法（JJJS(Japanese James Joyce Studies)）金井嘉彦，吉川信，横内一雄編著，言叢社, 2022 年

本専修の特殊講義および演習は専任教員のほか，人間・環境学研究科および学外の教員によって行われ，英語学英文学およびアメリカ文学のほぼすべての分野を網羅するようになっている。英米人教員によるものを除いて，講義および演習は日本語で行われるが，その場合にも教材は英語の原典を用い，作品の正確で厳密な読解を特に重視する。

研究テーマおよび方法論はすべて学生の独自性にまかされており，自由なテーマについて研究を進めるのが本専修の基本方針である。ただし，とくに前期課程においては特定の狭い分野にのみ目を向けることなく，隣接する分野についても広い関心を養ってほしい。

最近では外国での学会で院生が研究発表を行う機会も珍しくない。研究室で行われる外国からの研究者による特別講演，セミナー等にも積極的に参加・貢献することが望まれる。

フランス語学フランス文学専修

教　授　　永盛　克也　　17 世紀フランス文学、ラシーヌ
教　授　　村上　祐二　　フランス近現代文学、プルースト
准教授　　鳥山　定嗣　　フランス近代詩、ヴァレリー
特定准教授　ジュスティーヌ・ル・フロック　　17 世紀フランスの思想と文学

上記に加えて，人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。
教　授　　森本　淳生　　19-20 世紀フランスの文学と思想　マラルメ、ヴァレリー

〔主要著書・論文等〕
永盛『文学作品が生まれるとき―生成のフランス文学』（京都大学学術出版会，2010）（共著）；*Comment la fiction fait histoire,* Champion, 2015（共著）；*Scandales de théâtre en Orient et en Occident,* Sophia UP, 2021（共著）
村上 *La Grande Guerre des écrivains*, *d'Apollinaire à Zweig*, Gallimard, 2014（共編著）；Marcel Proust, *Cahier 44*, Brepols Publishers/BnF, 2015, 2 vol.（批評校訂版）
鳥山『ヴァレリーの『旧詩帖』―初期詩篇の改変から詩的自伝へ』（水声社，2018）；*Paul Valéry et les écrivains*, Fata Morgana, 2018（共著）
ル・フロック *Ardeur et vengeance：anthropologie de la colère au XVIIe siècle*, Champion, 2023（à paraître）
森本『〈生表象〉の近代―自伝、フィクション、学知』（編著）、水声社、2015；*Paul Valéry. L'Imaginaire et la genèse du sujet. De la psychologie à la poïétique,* Minard Lettres Modernes, 2009

さらに，学外の教員が講師として教育と研究指導に随時参加しており，2023 年度は伊藤玄吾同志社大学准教授が 16 世紀の文学を講じている。

本専修の学生はフランスの文学・芸術・歴史・言語について広く学び、とくに関心のある主題について深い知識を身につけることが求められる。研究対象は狭義の「文学」に限ることなく自由に選ぶことができる。それだけに学生自身が自覚的に問題意識をもつことが重要になる。

本専修ではフランス語で修士論文を執筆することが義務づけられているため、高度の語学力が要求されるが、論文の準備と執筆を通して実践的に研究方法を習得してもらうことがその主眼である。専任のフランス人教員はフランスの伝統的なテクスト解釈法や小論文執筆の方法を実践的に教授し、さらにはフランス政府給費留学生試験の準備や修士論文の指導・添削にも関わっている。

本専修は学生・大学院生に対して留学を推奨しており、留学に関する相談には教員がきめ細かく応じている。実際、大学間協定や奨学金制度を利用してフランスやスイスの大学に留学する学生、フランスの大学において博士論文を執筆する大学院生が多いことが本専修の特徴である。

研究者の来日講演や国際シンポジウムの開催など、フランス語圏の大学との交流も活発に行われている。これらの講演会やシンポジウムについては専修のホームページに随時案内が掲載される。
https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/french_lang_lit/fll-top_page/

イタリア語学イタリア文学専修

准教授	村瀬　有司	16 世紀イタリアの詩と詩論
特定准教授	イダ・ドゥレット	近現代イタリア文学

〔著書･論文〕 村瀬：トクァート・タッソ『詩作論』(訳書、水声社、2019 年)、パオロ・ジョーヴィオ『戦いと愛のインプレーザについての対話』（抄訳、『原典イタリア・ルネサンス芸術論』下巻、名古屋大学出版会、2021 年、所収）；*Some effects of separated direct speech in Tasso's «Gerusalemme liberata»* in «Studi Tassiani» 69, 2021.
ドゥレット： E. Montale, *Antologia da "Altri versi"*, prefazione di Alberto Casadei, introduzione, selezione e commento a cura di Ida Duretto, Pisa, ETS, 2017. *«Il mondo può / fare a meno di tutto, anche di sé». Montale, Sartre e il tema della fama in "All'alba"*, in «REM, Rivista Internazionale di Studi su Eugenio Montale», 1, 2020. *«Que' due lettori (forse voleva dire attori)»: Madame de Staël, Leopardi e la traduzione 'perfetta'*, in «Studium Ricerca», 5, 2020.

イタリア文学は，ダンテ，ペトラルカ，ボッカッチョの三大詩人を筆頭に，アリオストやタッソらルネサンスの詩人たち，マキァヴェッリやブルーノをはじめとする個性的な思想家，ガリレオに代表される科学者，さらにはゴルドーニやレオパルディやマンゾーニ，あるいはピランデッロやカルヴィーノやウンベルト・エーコといった近現代の作家・詩人・戯曲家など，多彩な逸材を擁している。特にイタリアの古典作品の影響は，中世から現代に至るまで、ヨーロッパの文芸・芸術・思想に幅広い影響を及ぼしている。

一方、イタリア語学イタリア文学を専門に学ぶことのできる国内の研究機関は非常に少ない。研究の裾野が狭いために、重要でありながらいまだ日本に紹介されていない詩人・作家も数多い。このような現状のなか、当専修は、国内の数少ない研究機関としてイタリア文学を学ぶ貴重な機会を提供している。

専修担当教員の村瀬は，ルネサンス期の詩と詩論を研究している。特定准教授のイダ・ドゥレットは近現代のイタリア文学の研究を行っている。専修の授業では、ダンテ、ペトラルカからレオパルディ、モンターレ、カルヴィーノまで、多様な詩人・作家を取り上げている。また他大学の先生方の協力をえて幅広い分野からトピックを提供することに努めている。若手研究者主催の読書会も盛んに行われている。

専修の授業で何よりも重要となるのは、原典の正確な読解である。大学院においてもまずイタリア語の読解力を十分に培ったうえで、各自の研究分野にアプローチすることになる。なお、最近の修士・博士論文で取り上げられた作家・詩人は、ダンテ、ボッカッチョ、ロレンツォ・デ・メディチ、タッソ、マンゾーニ、クローチェなどである。

専修の情報はこちらから：HP ｜ 京都大学イタリア語学イタリア文学専修 (italomaniakyoto.wixsite.com)

(Twitter) https://twitter.com/italkyoto

哲学専修

教　授　　出口　康夫　近現代哲学・分析アジア哲学
准教授　　大塚　淳　　科学哲学（生物学の哲学，統計学の哲学）
特定准教授　大西　琢朗　論理学，数学・論理学の哲学
特定講師　　五十嵐 涼介 論理学史，論理学・情報の哲学

〔主要著書・論文等〕

出口　*Nothingness in Asian Philosophy*,　Routledge, 2014.（共編著）
Moon Points Back, Oxford UP，2015.
What Can't be Said, Oxford UP, 2021.（共編著）

大塚　Causal Foundations of Evolutionary Genetics (*British Journal for the Philosophy of Science,* 2016),
The Role of Mathematics in Evolutionary Theory, Cambridge UP, 2018.
『統計学を哲学する 』, 名古屋大学出版会, 2020.

大西　Substructural Negations (*Australasian Journal of Logic*, 2015).
Bridging the two plans in the semantics for relevant logic (New Essays on Belnap-Dunn Logic, 2020).
『3STEP シリーズ論理学』 昭和堂，2021 年.

五十嵐　情報の哲学史試論――『ポール・ロワイヤル論理学』・ライプニッツ・カント――（『哲學研究』，2023）
判断はどのようにして対象と関わるか：カントにおける単称判断とその意味論（日本カント研究, 2017）
A reconstruction of ex falso quodlibet via quasi-multiple-conclusion natural deduction (Logic, Rationality, and Interaction，2017)

本専修は京大文学部創設以来の専修であり，西田幾多郎・田邊元を始めとする歴代スタッフの下で「京都学派」と呼ばれる哲学者を輩出してきた。その伝統を踏まえ，高等教育機関における哲学・思想系の教員(いわゆる専門の哲学研究者)を育てることを主眼においた教育がなされている。

他の多くの職種と同様，哲学の「職業訓練」でも，なによりも重要なのは基礎訓練である。哲学における基礎訓練とは，語学や論理学にじっくり取り組むことで，テキストの読解能力と論理的な思考能力を身につけることに他ならない。解説書の類ばかりを読んで，いたずらに哲学的物知りになるよりも，自分の語学力・論理力を地道に伸ばす努力を怠らないこと。これが，本専修の大学院への進学を希望する諸君におすすめしたい勉強法である。なお，このような観点から，本専修の大学院生には「論理学」「ギリシア語」「ラテン語」のうちから一つを選んで必修することが課されている(既習者は除く)。

本専修の大学院には他学部・他大学の出身者も少なくなく，その割合は 3 分の 1 にのぼっている。その専攻の対象も広く，スピノザ・ヒューム・カント・西田・ウィトゲンシュタイン・ドゥルーズ・グッドマンといった近現代の古典的な哲学者から，言語哲学，論理学の哲学，生物学の哲学，認識論など，現代哲学のさまざまな分野におよんでいる。より具体的にどのような研究対象が選ばれているかについては，専修のホームページ上の各種の情報，特に「所属院生」のページを見て頂きたい。

近現代の代表的な思想家の思索のスタイルを批判的に摂取する一方で，数学・論理・科学・文学・芸術・宗教・政治・社会など，狭義の哲学以外のさまざまな事柄に関しても，他人の受け売り

ではない自前の知識を組織的に身につけること。また応用哲学的な問題にも積極的に関心を払いつつ，できるだけ早い時期に留学し，海外の第一線の研究状況に直接触れるとともに，実践的な語学力を養うこと。以上が本専修で推奨されている研究スタイルである。端的に言って，本専修では，古典的な問題意識を踏まえ，現代の最前線の哲学的な課題に挑むという姿勢が求められている。「オーセンティックかつアバンギャルド」。これが本専修のモットーなのである。

西洋哲学史専修

(古代)　准教授　早瀬　篤　　プラトン，アリストテレス
(中世)　教　授　周藤　多紀　　13 世紀のスコラ哲学
(近世)　教　授　大河内　泰樹　　ヘーゲルを中心とする近現代哲学

〔主要著書・論文等〕　早瀬　'Dialectic in the *Phaedrus*' *Phronesis* 62, 2016. 「プラトン『パイドン』における形相原因説」(『哲学研究』608 号, 2022).
周藤「トマス･アクィナスの《モドゥス》研究（一）（二）」(『哲学研究』第 608-609 号，2022-23 年).
Boethius on Mind, Grammar and Logic, Brill, 2012. 「中世の言語哲学」（共著）(『西洋哲学史 II』講談社，2011 年)．ジョン・マレンボン『中世哲学』岩波書店, 2023 年（訳、解説）
大河内　*Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2008（単著）『個人的なことと政治的なこと―ジェンダーとアイデンティティの力学』彩流社、2017 年（共著）,『はじめての政治思想』ミネルヴァ書房, 2021 年(共著), 『資本主義と危機　世界の知識人からの警告』岩波書店, 2021 年(共著)

本専修は，西洋哲学史における古代，中世，近世の三つの研究分野をふくんでおり，研究上および運営上でも相互に密接な関連を保っているが，ここでは便宜上，三つの分野に分けて記述する。
(古代)　本研究室が目指すのは，哲学という営みが形成・確立された現場から，古代哲学の特質を理解すると同時に，哲学の基礎的な問題をその根源にまで遡って平明に考察することである。そのためにはテキストの厳密な読解が前提となるので，古代ギリシア語に精通することが必須であり，またラテン語や近代西欧諸語も習得することが望ましい。初期ギリシアから後期ローマおよびその周辺にまでわたる広範な研究領域のなかで，研究対象と方法の選択は各自の自由にゆだねられており，最近では研究テーマは多様化している。ただしプラトンとアリストテレスの哲学を基本とした思考と文献学の訓練は重要であり，他のテーマを主題とする研究にとっても基礎となるだろう。また当研究室が運営の中心となって「古代哲学会」が組織され，機関誌『古代哲学研究(メトドス)』が年 1 回発行されており、院生も積極的に論文を投稿し、活発な議論の場となっている。
（中世）　本専修がカヴァーする研究領域は，古代末期のキリスト教教父時代からスコラ学をへてルネサンスに至るまでの哲学である。研究をすすめるためには何をおいても原典テキストの綿密な読解が要請されるので，この時期の学問言語であるラテン語に習熟していることが必須の条件となる。さらには，西洋中世哲学は古代ギリシア哲学との連関をもちつつ成立しているために，古典ギリシア語についても初歩的文法の知識は必要である。また，西洋中世哲学の根底的背景としてのキリスト教についても，基本的知識が要求される。以上のような歴史的知識と哲学的思考能力を基礎として，具体的な研究対象の選択は学生本人にまかされる。西洋中世哲学史の研究室には，その出身者を中心とした京大中世哲学研究会が組織されており，そこで研鑽を積むことができるとともに，年 1 回発行されている機関誌『中世哲学研究(VERITAS)』に研究を発表することができる。
（近世）　近世哲学史専修は，近世から現代にかけての西洋哲学を対象範囲とし、地理的にも言語的にも時期的にもまた哲学的傾向からいっても多様な哲学者・哲学説がそこには含まれている。志望学生に求められるのはそうした中から自分が関心を持った哲学者や哲学的問いに熱意をもって取

り組むことである。どの哲学者や哲学思潮を研究対象とするとしても、事柄としての哲学と哲学的テクストとの両方に誠実に取り組むことが求められる。その際には、研究対象とするテクストが書かれたオリジナルの言語で取り組むことが原則として求められる。研究室という場は、教員から指導を受ける場であると同時に学生同士が学びあい、切磋琢磨しあい、またサポートしあう場である。自らの思考と知識を、議論を通じて深化させていくのと同時に、仲間の主張には関心を開いて耳を傾け、相互の研究に貢献し合う姿勢が求められる。

日本哲学史専修

教　授　上 原　麻有子　　西田哲学をはじめとする近代日本哲学，身体・技術・芸術論，翻訳学，女性哲学

助　教　ウィルツ・フェルナンド　　京都学派，ドイツ観念論，神話の哲学

〔主要著書・論文等〕上原　「日本哲学の連続性」（共著『世界哲学史 8―現代グローバル時代の知』、ちくま新書、2020 年）、「高橋、西田、ボーヴォワール、レヴィナスにおける性差ある他者性を問う」（共著 Transitions- Crossing Boudaries in Japanese Philosophy, Chisokudō Publications, 2020 年

「創造する翻訳―近代日本哲学の成長をたどって」（共著『近代人文学はいかに形成されたか 学知・翻訳・蔵書』勉誠出版、2019 年）

「西田哲学の再解釈―行為的直観としての顔の表情」（『思想』No.1099, 2015 年）

ウィルツ　Phänomenologie der Angst. Tübingen: Mohr Siebeck, 2022; ‘Miki Kiyoshi’s philosophy of history and the historical role of myth’, Asian Philosophy (2022): 1-17; ‘Myth and Ideology in Miki Kiyoshi’, European Journal of Japanese Philosophy 5(2020): 75-102; ‘Die Schichten der Zeit Schellings Periodisierung der Geschichte und seine Kritik der homogenen Zeit im Rahmen seiner Philosophie der Mythologie’, Schelling-Studien 6(2018): 43-62.

本専修では，いわゆる日本思想史ないし日本文化史と異なり，研究の力点を明治以降、今日までの日本の哲学の形成と発展の理解においている。つまり西洋の哲学に出会った明治以降の日本の哲学者が，そこで何を見出し，何を問題としたのか，さらに，西洋の哲学の受容と再解釈というプロセスの中で，いかなる独自の思索法を生みだしていったのか。このようなことが主要な研究対象となる。

「哲学の歴史」を考えるにあたり，「歴史」の面に重点をおいて，たとえば西田幾多郎や田辺元の思索の発展の跡をたどり，そこから問題を引き出していくということも可能であるし，あるいは「哲学」の面に重点をおいて，言葉や身体，自己，歴史というテーマを設定し，主として日本の哲学者の思索を手がかりとし，その問題を展開するということも可能である。またそのような考察を通して，日本の文化的・思想的創造の向かうべき方向を模索することも課題の一つである。

いずれにせよ，大切なのは，日本の哲学だけでなく，欧米の哲学についての知識も深め，広い視野で日本の哲学を探求することである。日本の多くの哲学は，欧米の哲学との対決を通して，またそれを踏み台として生みだされたのである。欧米の哲学を理解することなしに，日本哲学を研究することはできない。日本の哲学者の創造的な仕事を評価することも，そのような視点からはじめて可能になるのだ。

以上のようなことから、本専修の履修者には，西洋哲学に関する知識，欧語文献を読みこなす力が求められる。したがって，哲学・宗教学講座の他の専修の講義や演習にも積極的に参加してほし

い。

一方で，日本の哲学は，日本，あるいは東洋の思想・文化的伝統においてこそ，はじめて形成され、独自性を発揮したと言える。したがって、日本と東洋の伝統，例えば仏教や儒教という視点から，日本の哲学を探究することも必要であり，これは多様な形での研究テーマとなり得る。

以上のように，日本の哲学は，本質的に「比較哲学」として形成されたということが理解できるだろう。では，比較哲学研究の切り口をどこに見つけるのか。「日本」という視点にこだわりながら，独自の研究の方向を打ち出したいという意欲のある方には，是非，本専修で思索を深めてほしい。

従来、本専修では、京都学派の思想的中心を占める西田幾多郎、田辺元、三木清といった哲学者、さらに思想的に近い位置にある和辻哲郎、九鬼周造など限られたテーマに、大学院生たちの関心は集中する傾向にあった。しかし近年、日本哲学の分野で研究されるテーマに大きな広がりが見えてきており、戸坂潤、柳宗悦、中井正一、廣松渉、大森荘蔵、井筒俊彦など、今までにまだ研究が十分進んでいない新しいテーマを求める学生が増えている。また、環境、倫理、数学、科学などの切り口による研究も出てきており、在籍している学生たちも、様々な方面からの刺激を受けて勉強に励んでいる。また、近年、哲学者らに関する新資料の発見が相次ぎ、その翻刻や公表も進んでいる。一方で、外国の研究者の関心を強くひいているのが、日本哲学という分野である。国際的な出版物、学会の企画などは急速にその数を増している。以上のようなことから、本分野の新開拓はさらに進んでゆくと考えられる。

本専修は，毎年，次のような教育・研究に関する活動を行っている。大学院生による国際学会での研究成果発表，日本哲学史フォーラム(年２回の公開講演会)の開催，『日本哲学史研究』(紀要、電子版)刊行。

日本哲学史専修についてより詳しい情報を得たい方は，以下の HP をご覧ください。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese_philosophy/jp-top_page/

倫理学専修

教　授　児玉　聡　　英米倫理思想史・応用倫理学
助　教　CAMPBELL, Michael　規範倫理学・メタ倫理学

〔主要著書・論文等〕　児玉『功利と直観』(勁草書房，2010)，Satoshi Kodama，『実践・倫理学』（勁草書房, 2020）"Bentham's Distinction between Law and Morality and Its Contemporary Significance.", *Revue d'études Benthamiennes*, (2019)，児玉聡「スペンサーの進化倫理学の検討」『哲学研究』603 号（2018）
Campbell “Companions in Guilt and Moore's Paradox” (Symposion Vol.4 (2): 151-173 Nov 2017), “Absolute Goodness: in Defence of the Useless and Immoral” (Journal of Value Inquiry 49 (1-2): 95-112, Jan 2015), *Wittgenstein and Perception* (Campbell, M and O'Sullivan, M (Eds) Routledge Feb 2015)

倫理学は「善い，悪い」「正しい，不正である」といった判断の基準を研究する学問である。遺伝子操作，環境破壊，データ捏造，ネット犯罪など，新聞をにぎわす社会問題は，本質的に倫理学的な問題の応用編である。アクチュアルな問題のなかに原理的な大問題が潜んでいるというのが，現代という時代の特徴である。まず「世界という大きな書物」を読むこと，すなわち現実の問題を深く分析して，そこから原理的な問題を発掘してくることが，倫理学の最初の課題である。

しかし，このような課題に独善的でない仕方で取り組むためには，古今のすぐれた倫理思想を正しく理解することが役に立つ。たとえば「社会的な価値は全て個人の選好に還元可能か」とか，「行為はそれが他人に迷惑をかけない限り社会的に拘束すべきでないか」，「そのつどの人間主観に相対的でない自体的価値は存在するか」といった問題を過去の倫理学者たちがどのように考えてきたのかを，それぞれのテクストに即して読み解くトレーニングは必須である。

このためには外国語を最低 2 つはマスターするとともに，倫理思想史の基本的な知識を身につけておくことが求められる。また，コンピュータを情報検索の手段として使いこなす必要がある。カントやミルなどの西洋の主要な倫理思想家の著作の多くは，現在はテキスト・データベース化されている。インターネットを利用して内外の文献目録や最新の研究論文を入手することが，どのような研究にとっても必要になってきている。

大学院における研究と学部レベルの研究は異なる。学部段階では一つの具体的なテーマ，もしくは一人の主要な倫理思想家の主要なテクストの一つを確実に読み，そこで問題にされている基本的な問題を理解することがまず求められる。それに対して，大学院では複数のテクストを縦横に読みこなすとともに，同時代またはそれ以降の関連文献を十分に検討したうえで，自分の研究が現在までの研究史においてどのように位置づけられるのかをしっかりと自覚した論文を作成することが要求される。倫理学専修について，さらに詳細を知りたい方は，次の専修のサイトをご覧ください。

http://www.ethics.bun.kyoto-u.ac.jp

宗教学専修

教　授　杉村　靖彦　　宗教哲学（現代フランス哲学・京都学派の哲学）
准教授　伊原木　大祐　　宗教哲学（現象学・グノーシス主義の諸問題）

〔主要著書・論文等〕
杉村『ポール・リクールの思想―意味の探索』(創文社，1998)，Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps. (共編著，Vrin，2013)，*Mécanique et mystique. Sur le quatrième chapitre des* Deux Sources de la morale et de la religion *de Bergson*,―（共編著, OLMS, 2018）,『渦動する象徴―田辺哲学のダイナミズム』（共編著、晃洋書房、2021），『個と普遍―レヴィナス哲学の新たな広がり』（共編著、 法政大学出版局、 2022）,*Témoignage et éveil de soi – Pour une autre philosophie de la religion*,（Paris, PUF, 2023）.
伊原木『レヴィナス　犠牲の身体』（創文社，2010），「悪の問題を再考する――現代哲学と反神義論」（『宗教研究』第 361 号，2009），「異端表象の哲学的利用――宗教史から反歴史へ」（『宗教史学論叢 26　越境する宗教史【下巻】』，リトン, 2020），『3STEP シリーズ宗教学』（共編著、昭和堂、2023）.

「宗教」の名の下で問題になりうる現象は実にさまざまであり，それに対する学問的なアプローチにも多種多様なものがあるが，当専修は，哲学研究を軸としてそこから宗教にまつわる諸問題へと接近していくという研究姿勢を基本としている。このような姿勢の前提にあるのは，宗教とは単に例外的な経験や特殊な信条・組織の問題ではなく，人間が人間として世界の内にあることの根源，自己の存在の根源が問われる場にほかならないという洞察である。そこでは，「宗教とは何か」という問いは，哲学の根本問題とおのずから触れ合うことになる。このように宗教と哲学とが切れ結ぶ地点に立ち，そこで求められる思索の行方を追究すること，その意味での「宗教哲学」が当専修の基本的な方向性である。この方向性は，西田幾多郎，波多野精一，西谷啓治，武内義範，上田閑照，長谷正當、氣多雅子という当専修の歴代の担当者が，多くの場合京都学派の哲学の展開との密接な連関の下で発展させてきたものである。

したがって，宗教史学，宗教心理学，宗教社会学，宗教人類学等々，およびそれらの方法論を駆使した記述的・実証的宗教学については，当専修のカリキュラムでは主題的に取り扱っていない。しかし，もちろんそうした分野に関する知識が不要だということではないし，学生諸君のそれぞれの関心に基づいた宗教現象・宗教思想へのアプローチを排除するものではない。実際，近年の宗教研究では，これまでの学問的区分や方法論の問い直しが強く迫られていることを考えると，当専修で行われているような研究との接点はますます増えてきているとも言えよう。

当専修の院生は，たいていの場合，欧米や日本の代表的な哲学者・宗教思想家から一人を選び，哲学研究という形でその思想を深く学んでいくというスタイルをとっている。宗教哲学という学問の性格上，研究は究極的には各人の実存的探求に根差したものにならざるをえないが，その探求を独善的なものにせず，思索としての深さと広さをもたせるためには，そのような行程を辿ることが不可欠だからである。そのために必要な語学力・テクスト読解力を身につけるべく，院生には厳しい訓練が課せられることになる。

ちなみに，ここ 10 年ほどの間に当専修の院生が専門としてきた思想家を列挙すると，カント，ヘーゲル，キルケゴール，ニーチェ，ハイデガー，ベルクソン，バタイユ，レヴィナス，ヴェイユ，リクール，アンリ，デリダ，ジェイムズ，親鸞，西田、田辺、西谷，井筒等、多岐にわたっている。とくに，現在の担当教員の専門領域との関係もあって，現代の仏独哲学に関心を寄せる者が多いことが近年の目立った傾向である。いずれにせよ，現代哲学の先鋭的な問題提起に触れつつ，京都学派の哲学の歴史的蓄積をも視野に入れて，古来哲学と宗教の接点において問われてきた根本問題を深く追求することができるという点に，当専修の際立った独自性があると言えよう。留学生や研究者も定期的に在籍し、以上の三つの局面の全てにわたって、国内はもとより、海外の研究者や研究機関と共同での催しも盛んである。詳しくは宗教学専修 HP を参照されたい。

なお，発足時から当専修と縁が深く，当専修の出身者が多数関わっている学会として，宗教哲学会がある。その機関誌『宗教哲学研究』(年 1 回刊行)は現在第 40 号を数え，日本の宗教哲学研究の一つの拠点となっている。

キリスト教学専修

教授　　津田　謙治　　古代・中世キリスト教思想，教父学，教理史，異端研究

〔主要著書・論文等〕　津田『神と場所 ― 初期キリスト教における包括者概念』知泉書館，2021.『マルキオン思想の多元論的構造』一麦出版社，2013.「オリゲネスにおける神的場所概念の考察 ― 『祈祷』の議論を主軸として」(『基督教学研究』38 号，2019).「初期キリスト教教父思想におけるオイコノミア概念 ― 否定神学、悪の問題を手掛かりとして」(『宗教研究』389 号，2017).「護教家教父思想における神の場所の問題」(『宗教哲学研究』31 号，2014).

キリスト教学専修は大正 11 年(1922) に創設されたが，特定の信仰や教義に基づく神学部とは異なり，キリスト教を純粋に学問的な見地から研究することを目的とする。この点で，本専修はキリスト教思想を研究対象とする諸大学の関連講座の中でも特徴的な位置を占めている。研究と教育はキリスト教の歴史と思想の全分野にわたって行われているが，その中でも伝統的には次の分野に力点が置かれている。

1. 旧約・新約学
2. キリスト教思想史，特に古代教父，宗教改革，近現代キリスト教思想
3. キリスト教思想の体系的・宗教哲学的研究

こうした諸分野に関して高度な学問的な研究を行うためには，文献テキストの文献学的あるいは歴史学的研究を基礎にした，キリスト教思想の厳密な理解が要求される。したがって，本専修志望者には，原典研究を行うに必要なギリシア語，ラテン語，ヘブライ語などの古典語の習得と，近代語(英語，ドイツ語，フランス語など)についての習熟が期待される。また，キリスト教の歴史や思想と深い関わりをもつ思想史(教会史や教理史の他に，哲学史や宗教史なども含む)についての知識も大切である。しかし，何よりも，志望者には，キリスト教を学問的に研究したいという意欲と情熱，そして基礎的な語学や知識の学習に要する持続力が望まれる。

授業は，本専修スタッフによる講義と演習のほか，学外からの非常勤講師によって，上記の諸分野の主要領域をカバーするように行われ，さらに他専修との共通の授業も含めることによって，キリスト教思想についての十分な学習が可能になるように配慮されている。津田教授は，古代から中世にかけてのキリスト教思想(教父学や教理史、特に護教家、初期ラテン教父、アレクサンドリア学派など)，あるいは近代ドイツのキリスト教思想(自由主義神学や宗教哲学、特にハルナックや宗教史学派など)を中心に教育・研究活動を行っている。授業がこうした専門領域を中心に広範な内容に及ぶことは言うまでもない。

キリスト教学専修では，授業のほかに，他専修や他大学の研究者・院生を交えた様々な研究会や読者会，本専修出身者を中心とした京都大学基督教学会(学会誌『基督教学研究』)を通して，学生にその視野を広める機会を提供している。また英米やドイツ，そして韓国や中国の研究者との学術交流を行うなど，キリスト教学研究を広い国際的視野のもとで進めるよう努めている。これは，本専修が多くの海外からの留学生を受け入れている点にも表れている。

本専修についてのより詳細な事柄については次のサイトを参照されたい。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christian_studies/cs-top_page/

美学美術史学専修

美学芸術

准教授	杉山　卓史	美学・感性論

美術史学

教　授	平川　佳世	西洋美術史
准教授	筒井　忠仁	日本美術史（特に近世絵画史）
准教授	田中　健一	日本美術史（特に仏教彫刻史）

〔主要著書・論文等〕杉山「Empfindnis 概念小史」(『哲学研究』第 605 号、2020 年）. *Computational Aesthetics,* Springer, 2019（共著）. 同「「われ感ず、ゆえにわれ在り」のヘルダーにおける成立」(『美学』246，2015).
平川，*The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Peter Lang, 2009.　同「スプランゲル作《最後の審判》―銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」(『京都美術史学』1, 2020).
筒井「又兵衛絵巻の伝来と享受」『岩佐又兵衛展』図録（福井県立美術館、2016 年）　筒井編『仏師と絵師：日本・東洋美術の制作者たち』(思文閣出版、2023 年)
田中「法隆寺金堂木造天蓋に関する諸問題」(『京都美術史学』第 2 号、2021 年)

本専修は，〈美学芸術学〉，〈美術史学〉，〈比較芸術史学〉の三分野からなり，上記の専任の教員のほか，非常勤講師の協力を得て多彩なカリキュラムを提供している。

〈美学芸術学〉では，美，崇高，滑稽，醜等の美的体験の特質や，芸術の成り立ち，芸術と社会の関係，芸術史の方法論等を理論的に研究する。この分野の研究者は，最終的には自分の言葉で美と芸術について語ることが求められるが，そのためには古典に通じる必要があり，また，新しい思想にも心を開き，それら諸々の理論に対して批判的な検討を加えるように努めなければならない。

〈美術史学〉では，日本，東洋，および西洋の美術作品を，それが制作され，受容された歴史的文脈に即して研究する。したがって，まず第一に実作品および古文献資料の調査に基づいた実証的な研究が重視されているが，併せて新しい研究書の精読も不可欠である。それゆえ，この分野の大学院生には，美術作品を見る繊細な眼を養うとともに，文献の正確な読解力を身につけることが要求される。

〈比較芸術史学〉では，地域，時代およびジャンルを越えた広い視野からの芸術の比較研究を行う。ここでは，日本における異文化理解の仕方，逆に日本文化の異文化への影響，さらには異なる文化間での芸術の交流の実態と可能性などについて，歴史実証的，あるいは理論的に考察することを目指している。この分野の大学院生にとっても文献研究が重要であり，研究対象に応じた外国語，漢文，古文の習得が必要なことは言うまでもない。

本専修は，以上の三分野からなり、大学院生は，主としてそのいずれの分野の研究に取り組むことになる。その一方で，各自の専門分野に閉じこもるのではなく，芸術全般に関する総合的な知識と視野を持つことも要求される。機会あるごとに博物館，美術館を訪ね，また演劇，文芸，音楽，

映画などに接して各自の芸術体験を豊かにしておくことが望ましい。

本専修を志望する学生は，何よりもまず芸術に対して深い関心を持ち，芸術を楽しむ者であってほしい。また，同時に自らの問題意識に基づいて，一人で粘り強く研究を進めることができねばならない。大学院生の研究発表の場として演習が設けられており，そこでは大学院生が教員とともに積極的に発言するよう期待されている。なお，本専修で行われている具体的な研究内容については，『研究紀要』，『京都美学美術史学』，『京都美術史学』，ならびにホームページを参照してもらいたい。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-top_page/

当研究室保管作品「たなばた」上巻

冊子装、縦 24.0 ㎝、横 18.3 ㎝、製作時期 17 世紀。

室町時代後期から江戸時代初め頃に作られた日本の短編物語の代表的なものの一つ。

日本史学専修

教　授　吉川　真司　　日本古代史
教　授　上島　享　　日本中世史
教　授　谷川　穣　　日本近代史
准教授　三宅　正浩　　日本近世史
助　教　松井　直人　　古文書室　(日本中世史)

〔主要著書・論文等〕　吉川『律令官僚制の研究』塙書房，1998，同『律令体制史研究』岩波書店，2021，同『飛鳥の都』岩波新書，2011，同『聖武天皇と仏都平城京』講談社学術文庫，2018。
上島『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会，2010，同『日本の歴史 08 古代天皇制を考える』(共著)講談社学術文庫，2009，同『日本宗教史』Ⅰ・Ⅱ(共編)吉川弘文館，2020～21。
谷川『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版，2008，同『岩倉具視関係史料上・下巻』（共編）思文閣出版，2013，同『講座明治維新 11　明治維新と宗教・文化』（共編）有志舎，2016，同『「甲子園」の眺め方―歴史としての高校野球』（共編）小さ子社，2018。
三宅『近世大名家の政治秩序』校倉書房，2014，同「江戸幕府の政治構造」(『岩波講座日本歴史』第 11 巻・近世 2，岩波書店，2014)。
松井「南北朝・室町期京都における武士の居住形態」(『史林』98-4，2015)，同「室町幕府山城国支配の展開と山城守護―南北朝・室町期を中心に―」(『史学雑誌』131-4，2022)。

吉川教授は，　日本古代の政治・社会・文化に関する研究を行なっており、近年は寺院史・地域史・文化交流史を中心に検討を続けている。上島教授は，政治・社会経済・宗教文化の側面より，日本中世社会の形成を考察しており，近年は鎌倉・南北朝期へと研究対象を広げている。谷川教授は，近代日本における教育と宗教の関係史を起点として，文化・政治・思想など，明治期を中心に近代社会の形成・展開過程を多角的に検討している。三宅准教授は，日本近世の政治史について研究しており，近世大名家の政治構造や幕藩関係を軸に考察を進め，近世国家の成立過程とその特質を研究している。松井助教は，都市京都と室町幕府との関係史的考察を基礎に、中世後期の政治・社会体制の展開を見通そうとしている。

日本史学専修では，幅広い分野のスタッフを揃え，日本史の統一的かつ総合的把握を目指して研究と教育を行っている。他学部や研究所など，学内諸機関から広く講師を迎えているのもそのような意図によるもので，単に日本史の枠内に閉じこもるのではなく，さらに広く国際的な視野から日本史をとらえる姿勢が必要である。院生諸君にはこの点をよく理解し，自身の専門分野を極めることは勿論，常に広い視野と関心を持って研究に取り組んでいただきたい。歴史学はもとより，国語・国文学，考古学，地理学，人類学，社会諸科学など隣接諸科学とその成果に関心をもつことが望ましい。

京大日本史の著しい特色として，実物史料による研究と教育を挙げることができる。古文書室・総合博物館には，三浦周行教授以来，歴代にわたって収集された厖大な古文書・古記録等が収蔵されている。これらは一学部，一研究室の蒐集としては他に類を見ないもので，日頃から学部・大学

院生の教育に用いられる一方，貴重な研究史料として広く学内外研究者の利用に供されている。歴史学の基礎は各時代固有の性格をもった文字史料の正確な読解力にある。院生諸君はこの恵まれた環境を生かし，演習以外にも日頃から古文書・古記録や影写本に親しみ，活字や写真によっては得られない歴史の手ざわりを実物史料によって感得し，それらに対する真の読解力を養っていただきたい。そのためには研究室が行う史料調査や総合博物館の展示に積極的に参加する姿勢が必要である。

本研究室ではまた，院生諸君による各種研究会や夏の古文書研修合宿など，自主的研究活動が盛んに行われている。これらにも積極的に参加し，また自ら組織し，活発な議論を展開してほしい。広く学外の研究者・研究組織との交流も不可欠である。そのためには研究室の主催する学会組織である読史会への積極的な参加も望まれる。博士課程修了時の学位論文提出を目指して，在学中から積極的に学術雑誌等へ研究成果を発表していただきたい。修士論文の公表はその最低の要件であろう。入学時から高い志をもって研究生活に入られることを希望する。

東洋史学専修

教　授　　吉本　道雅　中国古代史
教　授　　中砂　明徳　中国中世・近世史

上記に加えて，人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。
教　授　　矢木　　毅　朝鮮史
教　授　　宮宅　　潔　中国古代史
教　授　　古松　崇志　ユーラシア東方史

〔主要著書・論文等〕吉本『中国先秦史の研究』京都大学学術出版会，2005。
中砂『中国近世の福建人　士大夫と出版人』名古屋大学出版会，2012。
矢木『高麗官僚制度研究』京都大学学術出版会，2008。
宮宅『中国古代刑制史の研究』京都大学学術出版会，2011。
古松『草原の制覇　大モンゴルまで』岩波書店，2020。

東洋史学大講座は，東洋史学専修と西南アジア史学専修から構成される。そのうち，東洋史学専修の対象とする分野は，おもに中国・朝鮮・内陸アジア・東南アジアなどのアジア東方諸地域と，そこで展開する歴史現象の全般である。もちろん，東西交流史など，この枠を超えた分野も含まれる。現在のスタッフのほか，人文科学研究所から協力講座としての教員が加わり，さらに学内各部局や学外からの非常勤講師の協力もえて，多彩な専門教育が行われる。

広く歴史学は，おもに文献と文物(遺物・遺跡など)の二種の史料にもとづく。東洋史学では，従来から，その両方に依拠しつつも，より原典の文献史料に力点を置いた研究・教育を旨としている。対象とする地域・時間の長大さから，当然，扱う原典文献も多言語にわたるが，なかでもアジア東方で最大の文字史料群である漢語文献が中心となる。江戸期以来の「漢学」の伝統に，近代歴史学の方法論を合体させた学問体系には，巨大な蓄積と技術があり，その修得が，まず求められる。これに加えて，朝鮮語・モンゴル語・満洲語・チベット語などの諸語文献についても，学習の機会が開かれている。徹底した文献学の基礎に立った原典史料からの歴史把握こそ，東洋史学の最大の特色である。

中国史・漢語文献も含めて，あくまで外国史・外国語であるから，それぞれの言語そのものについても修得を心掛けてほしい。諸外国からの留学生も多く，研究室内での国際交流も活発である。さらに，日本人大学院生については，みずからすすんで留学・現地滞在などをはかり，ボーダーレスとなった国際学界のなかで自立できる能力の養成が望まれる。また，博士後期課程に在籍するものは，日本人・外国人を問わず，学術誌などへの論文発表をはかるとともに，それらを踏まえた博士論文の作成をめざすよう努めてほしい。

京都大学は，東洋史学を学ぶのに最も恵まれた環境にある。文学研究科図書館をはじめ，人文科学研究所内に設置された東アジア人文情報学研究センターや文学研究科の附属施設である文化遺産学・人文知連携センター(羽田記念館) などが，世界でもまれな東洋史学関係文献の一大宝庫を形作っている。また，専門研究者が，さまざまな方面にわたって，厚い層を形成している。教室内で

も，研修員・大学院生によるテーマごとの研究会が活発に行われている。なお，研究室には全国学会である東洋史研究会の事務局が置かれ，学術誌『東洋史研究』(季刊)を発刊するとともに，毎年 1 回，大会を催している。

西南アジア史学専修

教　授　磯貝　健一　　イスラーム期中央アジア史、イスラーム法廷文書研究
准教授　岩本　佳子　　イスラーム期中東史、オスマン朝史、遊牧民研究

〔主要著書・論文等〕　磯貝真澄・磯貝健一編『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂，2022 年ほか
岩本佳子『帝国と遊牧民：近世オスマン朝の視座より』京都大学学術出版会, 2019 年
岩本佳子「「ワクフのレアーヤー」たる遊牧民：オスマン朝における徴税権の複層化とその影響」『東洋史研究』第 80 巻第 3 号, 2021 年ほか

本専修では，西アジア・中央アジアなど，主にイスラーム世界の歴史を扱う。 本専修に所属する大学院生は，時代的には，古代オリエント史，イスラーム時代史，中東近代史のいずれの分野を専攻してもよい。ただし，現在は，イスラーム時代史に関する講義が多く開講されている。また地域的には，西アジア・中央アジアに限らず，イスラーム諸王朝下のインドや北アフリカ，スペインの歴史など，イスラーム教徒が主役を演じた時代であれば，いずれの地域を専攻してもよい。

演習は，古典アラビア語・ペルシア語・トルコ系諸語などのテキストを使って行われる。従って，大学院入学以前に，これらの言語のうち，最低 1 つ，望むらくは 2 つを習得しておく必要がある。未習得の言語については，入学後，別に開講されている初級の授業に出席して，それらを直ちに習得することが望ましい。

専修スタッフは，アラビア語・ペルシア語・トルコ系諸語などで書かれた原典史料によって歴史研究を行うことを基本的な姿勢とし，この研究方法を最も重視している。

また，研究を進めるためには，研究史の正確な把握も不可欠である。このため，大学院入学以前に，英独仏露など，できるだけ多くの言語の読解力を養っておくことが必要である。また，留学等の機会に備え，大学院在学中に，これらの言語の内，少なくとも 1 つについては，その会話能力をも身につけることが望ましい。

本専修がカヴァーする領域は，特にわが国では，なお未開拓な分野が多い。そのため，専修生は日頃から幅広い勉学を重ね，その蓄積の上に，広い視野から自らの研究テーマを選ぶことが必要である。そして，そのテーマについての研究方法を自ら工夫し，自らの歴史像を構築し，それを歴史の真実の姿に少しでも近づけることが望まれる。

関連施設として，上賀茂に羽田記念館がある。ここには，中央アジア・西アジア関係の文献が備えられ，講演会・研究会などが行われている。

また，本研究室には，関連学会である西南アジア研究会の事務局がおかれ，雑誌『西南アジア研究』 が年 2 回刊行されている。

西洋史学専修

教　授　小山　哲　　西洋近世史
教　授　金澤　周作　　西洋近代史
准教授　藤井　崇　　西洋古代史
講　師　安平　弦司　　西洋近世史

〔主要著書・論文等〕
小山　哲 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』(共著)　山川出版社，1998,『近世ヨーロッパの東と西――共和政の理念と現実』(共著)山川出版社，2004,『大学で学ぶ西洋史［近現代］』(共編著)ミネルヴァ書房，2011,『ワルシャワ連盟協約（一五七三年)』東洋書店，2013, 『礫岩のようなヨーロッパ』（共著）　山川出版社, 2016, 『「世界史」の世界史』（共著）ミネルヴァ書房, 2016, 『王のいる共和政――ジャコバン再考』（共著）岩波書店, 2022.
金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会，2008,『イギリス史研究入門』(共著)山川出版社，2010,『海のイギリス史――闘争と共生の世界史』(編著)　昭和堂，2013, ‘‘To vote or not to vote’: Charity voting and the other side of subscriber democracy in Victorian England’, *English Historical Review,* Vol. CXXXI No.549 (April 2016),『論点・西洋史学』（監修）ミネルヴァ書房，2020, 『チャリティの帝国――もうひとつのイギリス近現代史』岩波新書，2021,『海のグローバル・サーキュレーション――海民がつなぐ近代世界』（共編著）関西学院大学出版会，2023.
藤井　崇　『知と学びのヨーロッパ史――人文学・人文主義の歴史的展開』（共著）ミネルヴァ書房，2007, クリストファー・ケリー『1 冊でわかるローマ帝国』（翻訳）岩波書店，2010, *Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus* (HABES 53), Franz Steiner Verlag, 2013, 『古代地中海の聖域と社会』（共著）勉誠出版，2017, 『歴史の転換期 1 B.C. 220 年――帝国と世界史の誕生』（共著）山川出版社，2018, 『論点・西洋史学』（共編著）ミネルヴァ書房，2020, 『生き方と感情の歴史学――古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』（共著）山川出版社, 2021
安平弦司 ‘Confessional Coexistence and Perceptions of the “Public”: Catholics’ Agency in Negotiations on Poverty and Charity in Utrecht, 1620s–1670s’, *BMGN – Low Countries Historical Review* 132:4 (2017), ‘Delimitation of the “Public” and Freedom of Conscience: Catholics’ Survival Tactics in Legal Discourses in Utrecht, 1630–1659’, *Early Modern Low Countries* 3:1 (2019), ‘A Swarm of “Locusts”: Pro/Persecution and Toleration of Catholic Priests in Utrecht, 1620–1672’, *Church History and Religious Culture* 99:2 (2019), 「多宗派時代の市民権――宗教改革後ユトレヒトにおける都市共同体再編とカトリック」『史学雑誌』第 131 編 1 号, 2022, ‘Transforming the Urban Space: Catholic Survival Through Spatial Practices in Post-Reformation Utrecht’, *Past & Present* 255 (2022), *Nog meer wereldgeschiedenis van Nederland*（共著）Ambo Anthos, 2022

本専修は、古代ギリシア・ローマから現代に至るまでの西洋世界の歴史的発展を、政治、経済、社会、思想、文化、宗教の諸側面にわたって体系的に把握することを目指して、研究と教育を行って

いる。現在の専任教員４人はそれぞれポーランド近世史、イギリス近代史、古代ギリシア・ローマ史、オランダ近世史を主たる研究対象としながら、上記の課題と取り組んでいる。また、大学院生は各自の問題関心にしたがって自主的にテーマを決めて研究を行っており、その対象領域は専任教員の専門分野をはるかに超えて極めて広い範囲にわたっている。

以上のように本専修では、大学院生に対して何よりもまず自主的・自発的な研究態度を求めており、どのようなテーマを選びそれをどのような方法で解明して行くかは院生の自由である。しかし、自己の専門に狭く閉じこもることは厳に戒めるべきであり、研究室での教員や他の院生との日常的な討論を通じて、また本専修が組織し運営する学会「西洋史読書会」をはじめ、学外の様々な学会、研究会などに積極的に参加することによって視野を広げ、自らの研究テーマの意味を問い直して行くことが望まれる。

研究発表や論文執筆の基本的な方法については大学院演習で習得していくことになるが、自己の研究テーマに関わる方法論の習得と練磨は主として院生自身で行わなければならない。その際希望しておきたいのは、次の諸点である。第１は、いうまでもないことながら、それぞれの分野での先行研究の成果を十分に咀嚼した上で問題を適切に設定し、基本的な史料を用いてそれを解明していかなければならないことである。第２に、西洋史学はきわめて学際的な学問であり、隣接諸科学との関係がたいへん深いので、西洋史学の研究者になろうとする者には、学際的な感性と関連諸学の素養が今後ますます要求されるだろう。第３に、西洋史学の研究の重要な手段である外国語能力の運用に努めることが肝要である。今日のわが国における西洋史研究のレベルは欧米学界と変わらぬものとなり、一次史料に基づく独創性の高い研究ばかりでなく、日本語に加えて外国語によるその成果の公表が要求されるようになっている。そのためにも、外国語の精密な読解力と合わせて、コミュニケーション能力がこれまで以上に望まれよう。

本専修では、専任教員や本専修を運営の基盤とする研究会が主催する学会、国際シンポジウム、外国人学者講演会などがしばしば開かれるため、大学院生がそうした機会を利用して学会活動に馴染み、また外国留学の準備を進めるなど、授業以外でも専門研究者への歩みを進める環境がある。修士課程を修了して就職する予定の大学院生にとっても、本格的な学会活動や国際的な学術コミュニケーションの場に加わることは、グローバルな活動のための重要な準備の機会となろう。
本専修の活動については、西洋史学専修ホームページ（https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/european_history/eh-top_page/）と、オンライン学術誌『フェネストラ――京大西洋史学報』（http://hdl.handle.net/2433/234791）をぜひ参照されたい。

考古学専修

教　授　吉井　秀夫　　朝鮮考古学
教　授　下垣　仁志　　日本考古学

上記に加えて，人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。
准教授　向井　佑介　　中国考古学

〔主要著書・論文等〕
吉井『古代朝鮮　墳墓にみる国家形成』(京都大学学術出版会)2010 年。
下垣『古墳時代の国家形成』（吉川弘文館）2018 年。
向井『中国初期仏塔の研究』（臨川書店）2020 年。

本専修の基礎となった「考古学講座」は，1916(大正 5)年に濱田耕作によって設置された。これは，わが国最初の考古学講座である。つづいて，梅原末治，有光教一，小林行雄，樋口隆康，小野山節，山中一郎，泉拓良，上原真人の各教授のもとで，徹底した資料の観察とその分析を重視する学風が築かれ，深められてきた。1996(平成 8)年度にそれまでの講座制は廃され，大学院を重点化した新制度のもとで現在に至っている。

考古学は，過去の人間が作り，使用した「物」を材料に，過去の人間の行動を研究する学問である。材料となる「物」は，主に発掘調査によって獲得する。考古学研究の基礎となる「物」から過去の人間の「行動」を復原する手法，発掘調査によって必要な情報を獲得する手法や知識などは，学部学生の間にある程度まで身についたものとして，大学院教育は進められる。

考古学の研究対象は，人間生活の痕跡さえあれば，時間的・空間的な限定はない。厳密な発掘調査によって，さまざまな情報をもつ「物」＝データを集める。その「物」のあり方から，直接「物質文化」を認識し，背後にある「精神文化」を読みとり，それらの個々の研究成果の統合をめざす。一方，現代の考古学においては，例えば動植物遺存体の遺伝子観察など，科学的でミクロな分析も，過去像の復原に大きな成果をもたらしつつある。考古学を学ぶ者は，自らその分析を実施する必要はない。だが，少なくとも，生物学・化学・物理学・地質学・土壌学など，自然科学分野の分析技術やその最新成果に深い関心を払う必要がある。資料の分析を自然科学者に託すとき，一体，何を求めるのかは考古学者の責任である。また，製作者・使用者の直接の証言を得られない考古資料を解釈する上で，歴史学・地理学・民俗学・民族学・文化人類学・社会学など，他の人文・社会科学分野の知識もできるだけ身につけて欲しい。

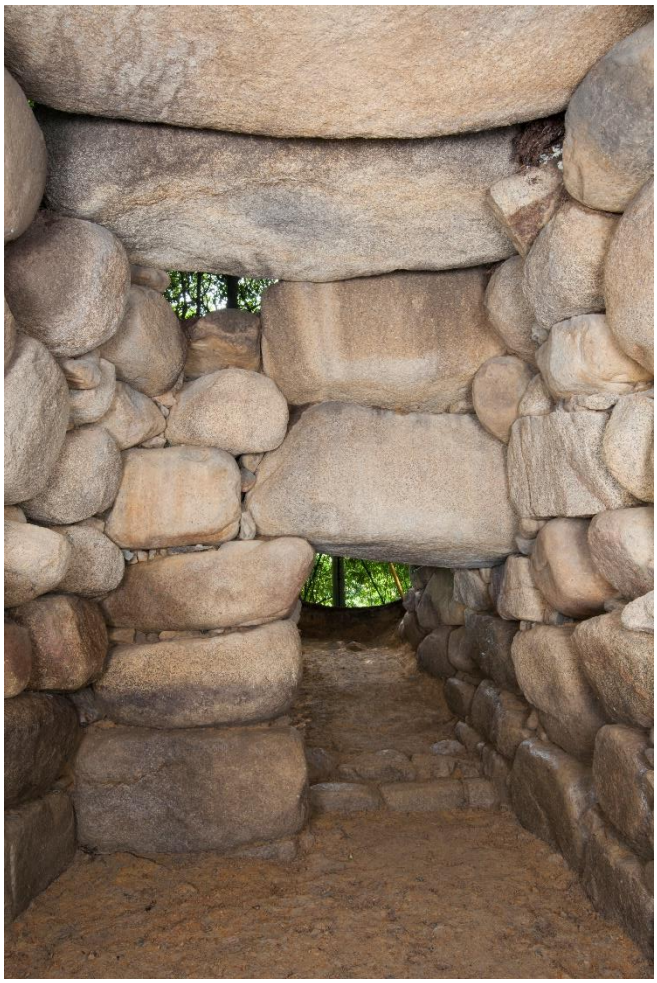
本専修の大学院で考古学を学ぼうとする人は以下の点に留意されたい。

① 大学院で考古学を学ぶことは，すでに研究者の末端に連なったという自覚を持って欲しい。他の研究者との協力，後輩の指導にも積極的になっていただきたい。それが自分の学業の成就とも密接に関わるはずである。

② 「物」を観察し分析すると，人間の「行動」が見えてくる。考古学は「物」を資料とする科学であると言いながら，その過程には鋭い感性や直感を必要とする。これには先天的な面もある

が，研究者との交流や，発掘現場などを通じて養いうる点も少なくない。機会を捉えては，積極的に研究会・発掘現地説明会など，さまざまな場に参加していただきたい。

③　研究の基礎資料を得るために，他大学や行政機関・博物館・研究所などを訪問する機会はさらに増えるであろう。当然のことだが，その場合は，礼儀を尽くし，できるだけ迷惑のかからぬような配慮が必要である。研究者としての行動は，自分だけでなく，所属する組織や後輩・同僚の評価となることを忘れてはならない。



大阪府茨木市青松塚古墳石室（左）と
石室内発掘調査風景（上）

心理学専修

教　授　　蘆田　宏　　視覚科学　(感覚情報処理，視覚認知)
教　授　　黒島　妃香　　比較認知科学　(動物、知性、感情、進化)
准教授　　森口　佑介　　発達科学　(認知発達，脳発達，自己制御，想像力，経験)
講　師　　Duncan A. Wilson　　比較心理学・霊長類学

〔主要著書・論文等〕
蘆田「Comparing measurements of head motion and centre of pressure for body sway induced by optic flow on a head-mounted display.」 *Frontiers in Virtual Reality*, 3:1026718 (2022, 共著)
黒島「Does own experience affect perception of others' actions in capuchin monkeys (Cebus apella)?」 *Anim Cogn*, (2014, 共著); 「誤解だらけの”イヌの気持ち」(4 章) 財界展望新社、2015; 「Experience matters: Dogs (Canis familiaris) infer physical properties of objects from movement clues.」 *Behav Processes* (2017, 共著)
森口「自分をコントロールする力　非認知スキルの心理学」(講談社新書, 2019)；「おさなごころを科学する：進化する乳幼児観」新曜社，2014
Wilson 「Exploring attentional bias towards threatening faces in chimpanzees using the dot probe task.」 *PLoS ONE* (共著，2018)

人の心の働きについては，古来さまざまな視点から研究されてきているが，心理学は，思索や深い省察ではなく，客観的な行動の観察に基づいて，心の働きにまつわる諸法則やそのメカニズムを実証的に研究する科学である。心理学は広範な基礎・応用分野をもつが，本専修は認知を中心とする基礎的領域を扱っている。専修は，基礎心理学，実験心理学および基礎行動学の 3 分野で構成されるが，各分野は相互に密接な連携をもちながら大学院教育および研究を進めている。修士課程では，心理学の基礎的な分野について専門的理解を進め，博士後期課程では，専門的研究をさらに深め博士論文の作成をめざす。大学院生には，広い学際的視野に立って神経科学，生物科学，言語科学，情報科学などの関連分野に深い関心をもち，早期に研究テーマを決め，手足を動かして，それぞれの問題に深く切り込むことが求められる。また国際性を高め，英文の学術誌に研究成果を公刊することを目標に置いてほしい。

現在の教員が取り組んでいる研究テーマは多岐にわたるが，以下に主なものを記す。個体が示す知性や感情の働き及びそれらの進化と発達を，成人，乳幼児，及びヒト以外の多様な動物を対象として，行動的分析および認知神経科学的手法により明らかにしようとする研究(黒島、森口，Wilson)、基礎的な環境の知覚や認知，記憶，思考などの働きを，精密な行動実験を通じて分析するとともに，その脳内基盤をも明らかにしようとする研究(蘆田)などである。各教員は，それぞれ特色のある研究活動を国際的に展開している。心理学専修の各教員の現在の研究についてさらに深く知りたければ，次の URL を参考にされたい (http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/psy/)。

本専修教員はいずれも京都大学「こころの科学ユニット」(https://www.kokoro-unit.kyoto-u.ac.jp/)に参加している。また，本研究室では，学術誌「心理学評論」の編集に携っている。なお，本専修では、公認心理師受験資格のために必要な大学院修士課程レベルの科目は提供されな

い。

言語学専修

教　授　　定延　利之　　記述～理論言語学，日本語
教　授　　千田　俊太郎　　記述言語学，パプア諸語，朝鮮語，エスペラント
准教授　　キャット，アダム　印欧諸語歴史言語学，古期インド・イラン諸語，トカラ語
講　師　　大竹　昌巳　　文献言語学，契丹語

〔主要著書・論文等〕
定延利之『認知言語論』（大修館 2000），同『ささやく恋人，りきむレポーター』（岩波書店 2005），同『煩悩の文法』（筑摩書房 2008），同『コミュニケーションへの言語的接近』（ひつじ書房 2016），同『文節の文法』(大修館書店 2019)，同『コミュニケーションと言語におけるキャラ』（三省堂 2020）.
千田俊太郎「日本語の動詞語幹とアクセントに關する覺え書き」『ありあけ：熊本大学言語学論集』19，2020，同「ドム語の「一」を表はす形式とその用法について―同一性、唯一性、非現實性、個々別々性、不定性、特定性―」『言語記述論集』12，2020, Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj. Esperantologio / Esperanto Studies 3(11), 22–54, 2022.
キャット，アダム The Derivational Histories of Avestan *aēsma-* 'firewood' and Vedic *idhmá-* 'id.' In Stephanie Jamison, H. Craig Melchert, and Brent Vine (eds.), *Proceedings of the 25th Annual UCLA Indo-European Conference*, 39–48. Bremen: Hempen, 2014. 同 Tocharian B *ly(ī)ptsentar*: A New Class VIII Present. *Tocharian and Indo-European Studies* 17: 11–27, 2016. 同 Vedic *vrādh-* and Avestan *uruuād-*/*uruuāz-*. In Adam Alvah Catt, Ronald I. Kim, and Brent Vine (eds.), *QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida*, 21–33. Ann Arbor: Beech Stave, 2019.
大竹昌巳 Reconstructing the Khitan vowel system and vowel spelling rule through the Khitan Small Script, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 70(2), 2017，同「契丹小字文献における「母音間の g」」『日本モンゴル学会紀要』46, 2016，同「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』148, 2015.

本専修は，明治 41 年(1908)に開設された言語学講座を継承するもので，記述言語学，歴史比較言語学をはじめ一般言語学理論やフィールド言語学の方法，あるいはそれらを基盤とする個別言語に関する研究と教育が行われている。研究教育内容は現代言語学のほぼすべての領域をカバーしている。2023 年度の授業科目は，特殊講義科目として「モンゴル語族史概論」，「契丹語研究序説」，「リグ・ヴェーダを読む」，「日本語話しことばの文法Ⅰ」，「同Ⅱ」，“Khotanese and Iranian Linguistics”，“Tocharian and Indo-European Linguistics”，「中国語音韻学：中古音について」，「中国の方言について」，「多言語情報処理論」，「認知構文論」，「認知意味論研究」，「会話分析入門：やりとりの中の言語と行為」，「ソグド語文献から見る文献言語研究」，「英語の音声・音韻」，「バントゥ諸語概説」，「シベリア諸言語研究」，「コーパスと言語研究」，「統語論研究」，「言語の対照研究」，「古代エジプト語の理解に基づく古代エジプト史研究」，演習科目として「調音音声学」，「「魅力的な日本語」・

「難しい日本語」を題材とした日本語学・日本語教育的探究」,「動詞意味論」,「日露法廷通訳論」,「パンデミック時代のロシア語」,「ロシア語の動詞接辞の諸相」,「「ルスキー・ミール」批評」が開講されている。この他演習には必修科目として「言語学の諸問題」,「個別言語と一般言語理論(1)」,「同(2)」が設けられ，院生の研究発表とその内容についての議論が行われる。現在，修士課程に 17 名，博士後期課程に 7 名，計 24 名の院生が在籍する。そのうち 11 名が留学生である。また研究室には，ほかに学部学生が 29 名，研究生が 3 名所属し，研究生は全員が留学生である。学生の最近の研究内容は，記述言語学，歴史比較言語学，類型論，音声学，音韻論，統語論，意味論，談話文法，語用論，生成言語学，認知言語学など多岐にわたっている。また対象とする言語も日本語，朝鮮語，英語，タイ語，中国語，アイルランド語，ツングース諸語，リトアニア語，ゴート語，ギリシア語，サンスクリット語，ベトナム語，ビルマ語，アラビア語，モンゴル語，トルコ語，スワヒリ語，シンハラ語など，洋の東西を問わずさまざまである。なかには，日本の方言や琉球語，台湾やミャンマー，フィリピン，タイ，中国，モンゴル，アフリカなどで話されている少数民族の言語などの調査に出かける学生もいる。文献を頼りに古語の記述をめざす学生もいる。

過去数年間に提出された修士論文のテーマには次のようなものがある：「量詞の判断基準に関する日中対照研究―「方」と「者」,“方”と“者”を例として―」,「ビジ語の境界音調とアクセントーその起因とプロセスに関する考察」,「現代日本語の条件節中に出現しうるモダリティ形式についての分析」,「Twitter における日本語名詞化接尾辞の用法」,「韓国語における派生と屈折について：形容詞副詞化接辞「-i」を中心に」,「基準時直前の事態であることを表す朝鮮語の時間副詞について」,「ダグル語の形動詞に付く所有人称接尾辞について」,「呉語青田方言の音韻体系について」,「パイワン語のリンカーについて」,「シンハラ語における韻律の音響分析―動詞を中心に―」,「古代ギリシャ語における ā-語幹名詞・形容詞の機能と分布」,「トゥチャ語の声調に関する考察」,「琉球語喜界島上嘉鉄方言の記述的研究」, *Syntax and Semantics of Contrast Sluicing*; *On the Interpretation of Wh-interrogatives: A Formal Semantics Approach*; *Focus and Defocus in Cantonese Right Dislocation and its Syntactic Derivation*. また代表的な課程博士論文については次のようなものがある：「ベトナム語北部方言の音節内部構造の実験的研究」,「南琉球宮古語史」「ベトナム語の指示詞に関する諸問題―理論と記述―」,「スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法―名詞と動詞を中心とした記述と分析―」,「モンゴル語の母音に関する総合的研究」,「アイルランド語中性名詞の衰退に関する研究」,「認識視点と因果―日本語理由・目的表現の研究―」,「ロシア語不定代名詞の分布―否定が関わった環境を中心に―」, *An Optimality-Theoretic Analysis of the Japanese Passive*; *A Semantic Approach to Illocano Grammar*; *A Phonological Study of Yanbian Korean*.

現在における言語学の多様性は院生の研究テーマに反映されるだけでなく，その研究活動にも現れている。研究室には常に数種の私的研究会が設けられ，多様なテーマのもとに外部の若手も交えて自由活発な研究交流がみられる。年 3 回行われる言語学懇話会では，各方面で活躍する卒業生たちの多種多様な研究成果に親しく接することができ，その後で行われる懇親会も諸先輩と知り合う良い機会になっている。

学生たちの研究会の様子

社会学専修

教　授	太郎丸　博	社会階層論，数理社会学，社会学方法論
教　授	岸　正彦	沖縄、生活史、社会調査方法論
准教授	田中　紀行	社会学史，社会学理論，知識社会学
准教授	Stéphane Heim	経済社会学，産業社会学，　組織論
准教授	丸山　里美	ジェンダー研究、福祉社会学
(兼)准教授	安里　和晃	移民研究、アジア研究、社会福祉論
客員教授	筒井　淳也	計量社会学、家族社会学

〔主要著書・論文等〕

太郎丸『人文・社会科学のカテゴリカル・データ解析入門』ナカニシヤ出版，2005,『フリーターとニートの社会学』世界思想社，2006(編著),『若年非正規雇用の社会学』大阪大学出版会 2009.

岸『同化と他者化――戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版、2013 年,『断片的なものの社会学』朝日出版社、2015 年,『マンゴーと手榴弾――生活史の理論』勁草書房、2018 年,石岡丈昇・丸山里美共著　『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016 年,北田暁大・筒井淳也・稲葉振一郎共著　『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣、2018 年,打越正行・上原健太郎・上間陽子共著　『地元を生きる――沖縄的共同性の社会学』ナカニシヤ出版、2020 年,岸政彦編著　『東京の生活史』筑摩書房、2021 年,岸政彦編著　『生活史論集』ナカニシヤ出版、2022 年,石原昌家・岸政彦監修　沖縄タイムス社編　『沖縄の生活史』みすず書房、2023 年

田中『近代日本文化論 4　知識人』岩波書店，1999 (共著),『歴史社会学とマックス・ヴェーバー(上)』理想社，2003(共著),『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会，2013 (共編著)，『W. シュルフター著作集 5 マックス・ヴェーバーの比較宗教社会学』風行社，　2018（監訳）.

Heim “Economic Sociology and the Theory of the Firm: Lessons from the “Toyota Momentum” in the History of Capitalism”, *Kyoto Journal of Sociology*, Vol. 24, pp. 83-93, 2016, “Biopolitics and bureaucracy. The tragedy in three acts of the decay of Japanese national universities”, *Savoir/agir*, Vol. 37, No.3, pp. 107-113, 2016.

丸山『女性ホームレスとして生きる――貧困と排除の社会学』世界思想社, 2013, 『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣, 2016（共著）, 『貧困問題の新地平――〈もやい〉の相談活動の軌跡』旬報社, 2018（編著）, *Living on the Streets in Japan: Homeless Women Break their Silence*, Trans Pacific Press, 2019.

安里『労働鎖国ニッポンの崩壊』ダイヤモンド社,2011(編著), “Nurses from Abroad and the Formation of a Dual Labor Market in Japan” *Southeast Asian Studies*, Vol. 49, No.4：642-669,2012(共著),『親密圏の労働と国際移動』京都大学出版会,2018(編著).

筒井”Junya Tsutsui, 2019, *Work and Family in Japanese Society*, Springer.”,”Junya Tsutsui, 2013, *The Transitional Phase of Mate Selection in East Asian Countries*,” International Sociology 28(3): 257-276. ,筒井淳也, 2015, 『仕事と家族』中公新書,筒井淳也, 2021, 『社会学』岩波書店

社会学専修は社会学，社会人間学，比較文化行動学および比較社会学の各分野から構成されている。大学院教育は以上 4 分野で実施され，相互に緊密に結びついて社会学専修のカリキュラムを構

成している。

本専修が伝統的に重視してきたのは社会学理論の厳密な読解である。近代市民社会の成立と共に生まれた社会学の学説史的検討と諸社会理論の摂取は，本専修の伝統であり土台である。その一方で今日，われわれをとりまく社会は大きく変わろうとしている。社会制度や構造さらには価値観，社会意識にいたる現実の変化をとらえ分析する社会学が求められている。こうした状況の中で，本専修が特に力を入れているのが，具体的なデータに基づく社会と社会生活の批判的・実証的分析である。社会学分野では歴史資料を駆使した近世・近代社会や家族のダイナミクス分析，社会人間学分野ではカルチュラル・スタディーズの手法を用いた現代社会の矛盾の解明や数理モデル，計量的手法を駆使した階層・格差分析，比較文化行動学分野においてはフィールドワークやディープインタビューの手法を取り入れた実証的コミュニティ研究，そして比較社会学分野では，現代資本主義社会の変容を比較社会学的に研究する。授業は文学研究科だけでなく，京都大学で社会学を研究する他研究科，研究所に所属する多数の教員の協力によっても行われる。また，毎年国内外の大学からも多彩な非常勤講師を招いて開講される。年度によってテーマや講師の顔ぶれは交替するが，ジェンダー・セクシャリティ，地域社会，スポーツ，福祉，現代社会理論，社会調査法などの個別領域の研究が提供されている。

社会学専修を希望する学生には，海外の文献を読みこなすのに十分な語学力とそれを厳密に理解し分析する理論的能力が要求される。さらに具体的な問題意識をもって文献を渉猟し経験的な調査を自ら企画・実行する能力が期待される。社会学的な考え方を学びながらあくまでも具体的なテーマに知的好奇心を失わない学生を歓迎する。

地理学専修

教　授　米家　泰作　　歴史地理学，東アジアの環境史
准教授　埴淵　知哉　　都市地理学，健康地理学
講　師　杉江　あい　　社会地理学，開発地理学，地域研究（南アジア）

〔主要著書・論文等〕
米家『中・近世山村の景観と構造』，校倉書房，2002,『モダニティの歴史地理』（共訳），古今書院，2005. 『森と火の環境史』，思文閣出版，2019.
埴淵『社会調査で描く日本の大都市』(編)，古今書院，2022. 『地域と統計―〈調査困難時代〉のインターネット調査』(共編)，ナカニシヤ出版，2018. 『社会関係資本の地域分析』(編)，ナカニシヤ出版，2018.
杉江　"Solidarity economy versus neoliberalism?: microcredit in rural Bangladesh."*Journal of Business and Economics* Vol. 10, No. 9, 2019. "Do 'Islamic norms' impede inclusive development of women?: A case study of Islamic education for women in rural Bangladesh," In Awaya, T. and Tomozawa, K. eds. *Inclusive Development in South Asia*, Routledge, 2023.. 『カースト再考―バングラデシュにおけるヒンドゥーとムスリム』名古屋大学出版会，2023

当専修は，海外地域研究を含む地理学の幅広い領域の研究と教育の場です。そのため，上記専任教員に加え，他部局の先生方には学内講師として，学外からも非常勤講師の先生方に授業を依頼し，多様な講義の提供に努めています。

本専修は 1907 年，日本の大学では最初の地理学教室として創設されて以来，多くの優れた研究者を輩出してきました。教室の創設当初より史学科に所属していた関係から，歴史地理学や地理学史，古地図研究や海外地域研究などを大きな特色としてきました。

現在の院生たちは，これまでの教室の伝統や専任教員の専門分野にとらわれず，世界の地理学の研究動向に対する関心や現代社会の直面する諸問題への意識を踏まえて，それぞれ自由にテーマを設定し，研究に励んでいます。研究対象や調査・分析の手法，用いる資・史料やデータなど，いずれもきわめて多様です。また，調査地域も国内から海外まで，扱う時代も古代から現代まで広く対象としています。

大学院生と専任教員の全員が参加する大学院演習は，院生それぞれが研究の進捗状況を報告し，それに基づいて質疑応答や議論を行う重要な時間です。修士課程の院生は，卒業論文の内容によっては，それを加筆修正して学会誌に投稿を目指しつつ，2 年間で修士論文の完成を目指します。博士後期課程に進学あるいは編入した院生は，毎年度末に「研究報告」を提出して「指導認定」を受けますが，この「研究報告」は，学会誌に掲載された論文あるいは学会誌に投稿準備中の論文の内容をまとめたものであることが求められます。博士後期課程の院生は，投稿した数編や投稿準備中の論文をまとめて，課程博士論文を提出することを目標としています。

院生の皆さんには，院生同士の活発な意見交換も，指導教員による個別指導も，他の教員からのアドバイスも，それぞれの研究を進める上での大切な糧として，豊かな研究を実らせることを期待しています。地理学専修は，そうした院生の研究をさまざまな面でサポートできるよう，努めてい

ます。

京都大学地理学教室所蔵の絵葉書コレクション https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/postcard/

科学哲学科学史専修

教　授　伊勢田 哲治　京大文卒，京大修士修了，University of Maryland 院修了，
Ph. D.(Philosophy)
准教授　伊藤　憲二　東大教養卒，東大修士修了, Harvard University 院修了，
Ph. D. (History of Science)

〔主要著書・論文等〕
伊勢田『認識論を社会化する』（名大出版会 2004），『疑似科学と科学の哲学』(名大出版会 2003),『科学哲学の源流をたどる』（ミネルヴァ書房, 2018）
伊藤 『励起：仁科芳雄と日本の現代物理学』（みすず書房 2023 年 7 月出版予定）；"Transnational Scientific Advising: Occupied Japan, the United States National Academy of Sciences," *The British Journal for the History of Science,* online, 2023: 1-15; "Early Japanese Reactions to the Interpretation of Quantum Mechanics, 1927-1943," in Olival Freire, Jr. ed, *Oxford Handbook of the History of Quantum Interpretations* (Oxford University Press, 2022), pp. 687-707; "The Scientific Object and Material Diplomacy: The Shipment of Radioisotopes from the United States to Japan in 1950," *Centaurus* 63(2), 2021: 296-319;

本専修は，「科学とは何だろうか」という問いに哲学と科学史の二つの観点から答えることを目指す，日本では数少ない科学哲学科学史の専門家養成機関である。専任のスタッフだけではカバーしきれない領域については，非常勤講師を招いて，広く科学哲学および科学史の問題が扱えるように配慮している。本専修の第一の特色は，科学哲学と科学史の両分野が研究の両輪となっている点である。また，科学哲学における特色としては，論理的分析の重視，科学の具体的な題材(たとえば統計力学，進化論，空間・時間)に即した哲学的問題の重視，科学上の古典的著作の原典読解も踏まえつつ現代の科学哲学の問題 設定に即した視野の広い問題の追求が挙げられる。また，科学史においては，国際的な科学史・科学論の研究状況を踏まえた 20 世紀の物理学史および 19 世紀以降の日本における科学技術史を中心に，アーカイブズ資料および原典に基づいた個別研究を通しての，哲学的視点の下での歴史的な科学像の探求が特色として挙げられる。

大学院生がこの専修で研究を進めるにあたっては，科学の学説内容を理解できるだけの科学的知識 だけではなく，語学力や文献読解の能力という人文学特有の能力も必須である。科学を知らずに科学哲学や科学史をやることが無謀であるのと同様に，科学・哲学・歴史学・社会学・人類学・ジェンダー研究等の古典的著作を読みこなすための人文社会学的素養を軽視することもまた無謀である。たとえば，20 世紀前半の物理学を歴史学的に研究するためには理論内容を理解するための科学知識とともに論文を読める程度のドイツ語と 20 世紀の社会・文化の理解が必須である。研究テーマによっては，その他の言語を修める必要が出てくるかもしれない。科学哲学の例を挙げれば，時間と空間の哲学をやるには相対論を学ばずにすませることはできないが，他方で哲学においてこの問題がどう扱われてきたのかを理解し，その視点から科学者の著作を読み直す読解の力も要求される。修士課程に入る段階でこれらの条件を満たすのは難しいかもしれないが，その条件を自分の研究の必要に応じて将来満たしていくだけの心構えと根気は持っていてほしい。それだけの努力に値

する学際的で面白い問題がたくさん見出されるのがこの研究分野なのである。

科学哲学・科学史の隣接領域として科学技術社会論がある。これは科学技術についての社会学的・人類学的・心理学的分析や，科学技術と現代社会との接点で生ずる問題の分析・解決策の提案などを含む幅広い領域である。当専修の軸足はあくまで科学哲学・科学史にはあるものの，こうした科学技術社会論的研究を研究課題とすることも可能である。

本専修の修士論文については専修ウェブサイトで公開しているので参照されたい。
https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/philosophy_and_history_of_science/phs-student-masterstheses

メディア文化学専修

教　授　　喜多 千草　　コンピューティング史、現代技術文化史、現代文化学
准教授　　松永 伸司　　分析美学、ゲーム研究、現代文化学

〔主要著書・論文等〕

喜多　『インターネットの思想史』（青土社、2003）、『起源のインターネット』（青土社、2005）、「『社会的責任を考えるコンピュータ専門家の会（Computer Professionals for Social Responsibility）』の成立と発展」『史林』101 巻 1 号（2018）；

松永　「キャラクタは重なり合う」フィルカル 1 巻 2 号，2016 年、『芸術の言語』(ネルソン・グッドマン著、慶應義塾大学出版会、2017)（共訳）、『ビデオゲームの美学』(慶應義塾大学出版会、2018)

メディア文化学専修は、情報・史料学専修と二十世紀学専修が合併することにより、2018 年度に発足した新しい専修です。この新専修の理念・目的を以下に紹介します。

現代はメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化が著しく、文化や情報は短時間のうちに伝播拡散し、それにより国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式が生み出されています。しかし、同時に従来の文化・国家・制度も存続しており、社会的規範や歴史認識などをめぐる新たな政治的・文化的な軋轢を生みだしています。

本専修では、こうした現代特有のメディアや文化事象にかかわるさまざまな問題を考察します。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にあります。そのため本専修では、歴史学・哲学・社会学・文学に加えて、マンガ学、ゲーム学、人文学系の情報学などの科目が用意されています。

本専修での研究テーマはジェンダー表象、視覚文化、ファッション、ゲームなど多岐に渉りますが、所属学生には各々の研究テーマに即した方法論を自ら切り拓く気概が求められます。

現代史学専修

教　授　小野沢　透　　アメリカ現代史・国際関係史
教　授　塩出　　浩之　　日本近現代史

上記に加えて，人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教授　　高木　　博志　　日本近現代史
教授　　石川　　禎浩　　中国現代史
准教授　村上　　衛　　中国近現代史
准教授　藤原　　辰史　　農業史・環境史
准教授　小堀　　聡　　経済史

〔主要著書・論文等〕

小野沢“Formation of American Regional Policy for the Middle East, 1950 – 1952,” *Diplomatic History*, Vol.29, No.1, Jan, 2005；“The Search for an American Way of Nuclear Peace：The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty,” in *The Japanese Journal of American Studies*, No. 20, 2009.『幻の同盟―冷戦初期アメリカの中東政策』(上・下, 名古屋大学出版会, 2016 年).「「同時代」と歴史的時代としての「現代」」『思想』No.1149 (2020 年 1 月、岩波書店).

塩出 『岡倉天心と大川周明　「アジア」を考えた知識人たち』(山川出版社、2011 年).『越境者の政治史　アジア太平洋における日本人の移民と植民』(名古屋大学出版会、2015 年).『公論と交際の東アジア近代』(編著、東京大学出版会、2016 年)

現代史学専修は，1966 年に旧史学科の一講座として設立された，文学部の中では比較的新しい専修である。

現代史学専修は，「現代」という時代が，それ以前の時代とは異なる歴史的動態を有し，それゆえに，この時代を研究するためには，特定の国や地域を対象とする伝統的な歴史学とは異なる分析上の視点やアプローチが必要とされるという立場から研究・教育を行っている。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて，アジア・アフリカ地域が欧米を発祥とする主権国家の国際システムに取り込まれ，あるいは欧米列強の公式・非公式の支配下に入ったことで，地球上のすべての地域が相互に結びつけられ，「ひとつの世界」が出現した。近代以前にも遠隔地域間の交易や情報の伝播は見られたが，19 世紀後半以降に出現した「ひとつの世界」では，ヒト・モノ・カネ・情報などの国・地域を越えた移動や伝播は恒常的なものとなり，その速度と規模は，21 世紀の今日に至るまで，様々な曲折を経ながらも増大し続けている。この「ひとつの世界」は，地域を越えた人や社会の連携や相互依存を促進する一方で，新たな分断や対立をも引き起こしてきた。たとえば，地球上のほぼすべての土地が主権国家と植民地という制度のもとに分割されたことによって，それ以前の人的・経済的な結合が断ち切られる事態，あるいは対立しあう「国益」を追求するために国家が人的・物的資源を大規模に動員する

事態も，逆接的ではあるが，「ひとつの世界」が出現したことの帰結であった。現代史学専修は，人類の歴史が「ひとつの世界」の世界史として展開するようになった時代を「現代」と捉え，この「現代」に生起する様々な歴史的事象を世界史的な視野から分析し考察することを目指している。

現代史学専修の研究と教育は，分析対象の当事者や同時代の観察者が残した一次史料の精確な読解を考察の出発点に据える，実証的な歴史学の方法論を取る。現代史の研究では，オーラル・ヒストリーや図像・映像をも史料として用いることがあるが，それらについても，文字史料と同様に厳密な史料批判と合理的な解釈が必要とされる。本専修の特徴は，一次史料から得られた知見を，能う限り世界史的な文脈に位置づけて考察しようとする点にある。そのためのアプローチは，無限にあると言ってよい。たとえば，国際関係史や比較史のアプローチ，あるいはトランスナショナルな視点を導入することが有効なこともあるし，ナショナリズム，ポストコロニアル，ジェンダーなど，社会・政治・思想などに関する様々な理論を援用することで複雑に絡まりあう事象を解きほぐすのが容易になることもあろう。

本専修を志望する学生には，史料の読解に必要とされる言語を含む，複数言語の修得が必要とされる。また，大学院では，学術雑誌に掲載できるレヴェルの研究が期待されるため，実証的な研究を進めるために必要な一次史料を入手できることが，研究テーマを定めるための条件となる。これらを踏まえた上で，現代世界に対する幅広い関心を持って，意欲的な研究テーマに取り組んでほしい。

国際連携文化越境専攻 Joint Degree Master in Transcultural Studies

教　授	ミツヨ・ワダ・マルシアーノ	映画研究、メディア研究
教　授（兼）	Somdev Vasudeva	インド思想
准教授	安里 和晃	移民研究、アジア研究、社会福祉論
講師	Bjorn-Ole Kamm	日本研究、メディア研究
特定講師	Kjell Ericson	環境史、科学技術史

〔主要著書・論文等〕

教授　　ミツヨ・ワダ・マルシアーノ　　映画研究、メディア研究

著書　*Nippon Modern: Japanese Cinema of the 1920s and 1930s*（University of Hawai'i Press, 2008）；『ニッポン・モダン：日本映画 1920・30 年代』（名古屋大学出版会、2009）；『デジタル時代の日本映画：新しい映画のために』（名古屋大学出版会, 2011）；*Japanese Cinema in the Digital Age*（University of Hawai'i Press, 2012）；『NO NUKES:〈ポスト 3・11〉映画の力・アートの力 』（名古屋大学出版会, 2021）；*Japanese Filmmakers in the Wake of Fukushima: Perspectives on Nuclear Disasters* (Amsterdam: Amsterdam University Press, 2023).

編著書　*Horror to the Extreme: Changing Boundaries in Asia* (Hong Kong University Press, 2009)；『「戦後」日本映画論：1950 年代を読む』（青弓社、2012）；『＜ポスト 3.11＞メディア言説再考』（法政大学出版局、2019）『映像アーカイブの未来研究』（法政大学出版局、2024 刊行予定）.

教授（兼）　　Somdev Vasudeva　　インド思想

論文　"The Yoga of the Mālinīvijayottaratantra," *Collection Indologie* 97 (Pondichéry, 2004); "The Recognition of Sakuntalā by Kālidāsa," *The Clay Sanskrit Library* (New York University Press & JJC Foundation, 2006).

准教授　　安里 和晃　　移民研究、アジア研究、社会福祉論

編著書　『親密性の労働と人の国際移動』（京都大学出版会、2018）.

論文　「特定技能制度の創設と国際労働市場をめぐる送出国の動向」明石純一編『移住労働とディアスポラ政策』76-101, (筑波大学出版会, 2022); "Care Workers Migration in Ageing Asia," in Komazawa, O. and Y. Saito (eds.), *Coping with Rapid Population Ageing in Asia*. Jakarta, pp.63-73, (ERIA, 2021).; "Brunei Darussalam: Female Labour Force Participation and Foreign Domestic Workers," Fee, L.K., Hosoda, N. and Ishii, M. ed., *International Labour Migration in the Middle East and Asia: Issues of Inclusion and Exclusion*, 115-141 (Springer, 2019).

講師　　Bjorn-Ole Kamm　　日本研究、メディア研究

著書　*Role-Playing Games of Japan – Transcultural Dynamics & Orderings* (Palgrave, 2020).

編著書　*Debating Otaku in Contemporary Japan* (Bloomsbury, 2015).

論文　“A Short History of Table-Talk and Live-Action Role-Playing in Japan: Replays and the Horror Genre as Drivers of Popularity” *Simulation & Gaming* (2019); “Adapting Live-Action Role-Play in Japan: How ‘German’ Roots Do Not Destine ‘Japanese’ Routes” *Replaying Japan* (2019);「ライブ・アクション・ロールプレイ(LARP)という意識向上を目的としたシリアス・ゲーミング方法: “ひきこもり” についての LARP を例に」『作業科学研究』(2019); “Reenacting Japan’s Past That Never Was – The Ninja in Tourism and Larp,” Agnew, Vanessa, Juliane Tomann, and Sabine Stach eds., *Reenactment Case Studies*, 146-170 (Routledge, 2022).

特定講師　　Kjell Ericson　　環境史、科学技術史

論文　“The Misaki Marine Biological Station's Dual Roles for Zoology and Fisheries,” *Why Study Biology by the Sea?* (University of Chicago Press, 2020); “The Life and Times of Patent no. 2670: Industrial Property and Public Knowledge in Early Twentieth Century Japan,” *Patent Cultures: Diversity and Harmonization in Historical Perspective* (Cambridge University Press, 2020); “Judging the Perle Japonaise: The Techno-Legal Separation of Culture from Nature in 1920s Paris,” *Technology and Culture* 62, no. 4 (2021); “The Puzzle of the Thinly Coated Pearl: Aquacultural Ecology and the Politics of Density in Ago Bay,” *Historical Studies in the Natural Sciences* 53, no. 3 (2023).

本専攻は、京都大学大学院文学研究科とドイツのハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センター（Heidelberg Centre for Transcultural Studies, HCTS）との国際共同学位プログラムであり、両大学の緊密な連携のもと、英語で授業が行われます。学生は文化越境研究の基礎理論を学んでから、「知識・信念・宗教（KBR)」「社会・経済・統治（SEG)」「視覚・メディア・物質文化（VMC)」の 3 分野のうち 1 つを選び、国際共同指導を受けながら英語で修士論文を書きます。本専攻のすべての学生は、京都大学・ハイデルベルク大学の二重学籍を得て、日本・ドイツにそれぞれ一年間在学し、修了に必要な合計 30 単位を修得する必要があります。両大学がそれぞれの強みを活かし、アジアとヨーロッパにまたがる大学院教育を共同で行うことにより、人文社会系の横断的研究能力と多言語による発信能力を兼ね備えたグローバルな人材の育成をめざします。2021 年度からは、博士課程（文化越境学）も設立されました。

Welcome to the joint degree master program in Transcultural Studies at Kyoto and Heidelberg University. Transcultural Studies constitute a new research field in the humanities and social sciences that seeks to address the challenges posed by global connectivity to existing disciplines and frames of knowledge. In Japan, Kyoto University has instituted the first and until now only major in the country for this area of study, which is also the first international joint degree in the humanities. The Joint Degree Master of Arts in Transcultural Studies (JDTS) is an English language, research-oriented master program that combines interdisciplinary education with a transregional focus predominantly on East, South, and South-East Asia as well as Europe.

In their two years of studies, students choose one of three study foci: “Knowledge, Belief and

Religion (KBR)," "Society, Economy and Governance (SEG)," and "Visual, Media and Material Culture (VMC)," which in Kyoto are supported by our team of scholars from the disciplines of Cinema and Media Studies, Philology and Literature, Philosophy, History, Sociology, and Contemporary Culture. Kyoto University, Graduate School of Letters, has also newly started the Ph.D. program on Transcultural Studies from 2021.

ハイデルベルグ大学・ストラスブール大学派遣プログラムにて（2023 年 2 月）

JDTS's PR Leaflet

Examples of Master's thesis:

"Anarchism in Japan" (2019)
"Japanese Art and Modern Painting in China" (2019)
"Memory and Contemporary Art in Japan" (2019)
"Study on Institutional Eldercare in China and the Normative Cultural Phenomenon of 'Filial Piety' from a Transcultural Perspective" (2020)
"The Transcultural Dynamics of LGBT+ Discourses in Japan" (2020)
"Transculturation in American Chinatowns" (2021)
"Built Heritage in Kyoto and Its 'Reinvention'" (2021)
"Swapping Gender in Japan" (2022)
"Japanese Settler Colonialism and the Development of Rural Capitalism" (2022)